
世界の調和者

yuuyas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の調和者

【Nコード】

N6499Y

【作者名】

yuyas

【あらすじ】

ある日、神宮正和じんぐうましかずは少女を助けて死んでしまった。だが目を覚ますとそこには純白の世界、さらに目の前で絶世の美女が頭を下げていた？その人は自分のことを神と名乗って・・・「彼方を私の神しんにんしゃ認者にんしやになってもらって、私の担当している世界に生まれ変わっていただきその世界の調和者ちやうわしやになって下さい！」え？なんで！？

よくある異世界転生ものです。魔法や魔物がいたりのファンタジーもので、主人公最強、ハーレムありく主人公朴念仁>（後に正常になります）、人が死んだりします。この様なものが苦手なお方は

ご注意ください。

この作品は初の小説なので、誤字、脱字があると思いますが温かく見ててください。よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。以後よろしくお願いします。

ブローグ

「明日から夏休みだ」

俺、じんぐうまさかず神宮正和は叫んでいた。

なぜ叫んだかって？だってね、去年の夏休みはさんざんだったんだ。

去年のこの日、なんか久しぶりに公園行きたいな、なんて思ってた。行ったら

いきなり、男の子が出てきて道路に飛び出して行ったんだよ。

そしたら、曲がり角からトラックが出てきて男の子が轢かれそうになったんだ。

俺はとっさに飛び出して、男の子を抱え込んだ。

「痛っ」

奇跡的にどちらとも無傷と言っわけにはいかなかったようだ・・・俺は激痛がする右腕の方を見ると中の肉が見えてた・・・

その後、男の子のお母さんが来て、物凄く感謝してくれて救急車まで呼んでくれた。

診察を請けたら、腕の皮がむけて肉が見えてただけだった。折れてるかと思った……

で、このせいで俺は3週間右腕が使い物にならなくなり、治ったと思ったら残りの1週間宿題に追われ夏休みのさよならだ！

今年こそは遊びまくってやる！そんな事を思っていると去年事故にあった公園に来ていた……

嫌な予感がする。

俺はこの場所からいち早く逃げるために、全力で逃げた。へたれだつて、しょうがないだろ

また遭^あつたら夏休み消えてしま^あうじゃないか。

しばらく走って、さっき通った交差点にいた。

「はあはあ」

500mぐらい思いつきり走った。疲れたぜ……

俺は顔を上げると横断歩道に5、6歳の女の子が転んでいた。

信号が点灯し始めた、すごく痛かったのだろう。
危ないから女の子を助けようと

「プップ」

赤信号なのにワゴン車が曲がり始めた。後ろにはパトカーがいる。
盗難車だろう。ん？あの子めっちゃ危なくない？

（助けなきゃ！）

俺は全力で走り、少女を抱えた。
また夏休みが消えたな。また来年夏休み。

「バーン！」

・
音と一緒に俺の体に激痛が放ち、それと共に意識が消えていった・

そして、一人の少年が少女助けて命を落とした。

プロローグ（後書き）

読んで下さった方ありがとうございます。

この話で主人公がどんな人か分かったと思います。危険なのを分かっている人も人を助けてしまう。主人公体質、これ以外にも人助けしているのですがそれは、ストックが切れたときに書かせていただきます。と思っています。

次回は神との対面で、ここで色々能力をもらいます。
次話も読んでもらえたら嬉しいです。

神の世界（前書き）

2回目の投稿です。この作品で結構重要な神の登場です。名はヘルシスです。どうぞ、お楽しみください。

神の世界

「うゝ」

真っ暗な世界だ。

体が重い、なんでだ？

何かあつたけ？

あれ？確か女の子を助けて、そのまま・・・

死んだ？

でも、なんで体に感覚あるんだ？

力を入れると動けそうだな。

俺は回りを確認するため目を開いた。

「なんだゝ？」

俺は驚いた。目の前には純白の世界で広がっていた。それと、「何であなた頭下げてるの？」

なんかわかんないけど目の前に金髪の女性が頭を下げていたのだ。

「すいませんでした！」

頭を下げながら腰を何度も折っては伸ばしを繰り返してた。
辛くないのだろうか？

あ、そうじゃなかった。

「頭上げてください。」

「はい・・・」

やっと顔を上げてくれた。

それにしてもきれいだろ。

目の前の女性は絶世の美女と言ってもおかしくはないだろう。

それくらい的美貌《びぼう》だった。

でも、凄いまぶたがうるうるしてる。

にしても綺麗だな

「どうしたのですか？ぼつとして？」

あ、やば見とれてた。

「い、いえちょっと考えごととして・・・それにしてもここ何所ですか？」

あと何で謝っていたんですか？」

「ここですか？ここは神の世界という場所ですね。」

謝っていた理由は・・・私のミスで彼方を死なせてしまつて・・・

「え？ミスですか・・・」

「はい・・・少し時空を歪めてしまい、
彼方の生きる時間を減らしてしまつて・・・本当にすいませんで
した。」

「またもや頭を下げられてしまった。あのく何でまた涙目になるんですか！」

「いいですよ。ミスぐらい誰にもありますから。
それより次進みません？ほらくあの、神の世界？だっけその事で。」

「ありがとうございます。優しいですね。ではお言葉に甘えてここ
の説明をします。」

「神の世界言葉通りで、神々が住む世界です」

「切り替え速えく神々が住む世界？じゃあこの人は・・・」

「じゃあ、あなたは神様？」

「はい！私は神です。神宮正和さん」

「何で俺の名前を？」

「当たり前ですよ。神なんですから名前ぐらいは誰でも言えます」

「あ、そっか。神様の名前も教えてください。」

「私ですか？私はヘルシスです」

「ヘルシス、あ！すいませんヘルシス様」

やばい呼び捨ててしまった。

「いいですよ、ヘルシスで。というか、敬語もやめてもらえたら嬉しいです。」

「わかりました。じゃあ、ヘルシスさんで」「はい！」

良かった優しい神様で。

そういえば何でここにいるんだ？
だってここ神の世界だよね？

「ヘルシスさん。俺はなんでここにいるの？」
「あ、話してませんでしたね」

彼女は大きく息を吸ってから・・・

「彼方に私の神認者しんにんしやになってもらって、
私の担当ちやうつわしやしている世界に生まれ変わっていただき
その世界の調和者ちやうわしやになって下さい」

え？なんで！？

「何ですか！？こんな何にも取り得の無い俺なんか。っていうか神認者や調和者ってなんですか？」

「あ、あんまり一氣に言わないでくださいよ」

「なんか、涙目になってるし。これって俺悪い？
つか神としての威厳なさ過ぎだろう。」

「なんか、静かになってしまった。居づらい・・・
しょうがない俺から言わないと・・・」

「すみません。一氣に言いすぎました。じゃあ、一つ一つお願いします」

俺って結構甘いかも。

どうやら落ち着いた様で口を開いた。

「ありがとうございます。まずは神認者ですね・・・」

俺は彼女の長しんにんしゃいお話を聞いていた。

聞いた話だと神認者しんにんしゃと言うのは、

俺みたいに前の世界で死んだ奴がある一定の条件が揃そろえば、

神が認め—この世界（神の世界）に呼ばれて、生まれ変わり

神が干渉できない世界の乱れなどを直すものらしい。

このとき、前の世界の記憶は残っていないく、

神との対面時からの記憶しか残っていないみたいだ。

さらに、この神認者つてのにえらばれた奴は

そいつを認めた神の、1000分の1の力と

神神器の武器をもつ事が出来るようだ。

世界せかいのちよつわしやの調和者（以後調和者と訳す）は、

その世界で一人で世界の一番高位神がその者気に入り、
神の世界

ここに呼び出してその人に自分の担当している世界の調和者になっ
てもらって、

その世界に戻り暴走した神認者しんにんしゃや魔物の数を倒したりして調和する
ようだ。

そして、その人は神認者と一緒で神の力を受け取る事が出来る。

だが、力の桁が違う調和者はその神の10分の1の力を受け取れる
みたいだ。

だが、神器はもらえないし普段は力事態に封印が掛かっていて、

それを解除しなければその力は使えなく、他の神認者から比べてかなり弱いようだ。

たとえ、解除しても力に耐え切れず自爆するか、その力を操っても体に負担が掛かり大怪我を負ったり、あまりの力に世界が拒絶して周囲の環境がかなり悪くなったりするようだ。

使い勝手悪いな。

俺のように調和者と神認者の二つの力をもっている事は前代未聞のようで、神認者はヘルシスさんが自分の世界に干渉したいからしたようだ。調和者は前の世界の記憶をある程度もっていないと出来ないようなので（何故だかは教えてくれなかった）俺には前の世界の記憶は残るようだ。

なんで俺が選ばれたかはヘルシスさんに気に入られた事と、事故に遭いそうになった人たちを助けたりした事で、

自分で言うのもなんだがその、心が優しいっていうのが重要みたいだ／／／

恥ずかしいな。

「誰に話しているんですか？」

えっ？なんで声に出していないはず。

「考えただけで思考は読めますよ。神ですから！」
「すごいっすね」

これしか言えない、今から考える事をやめよう。
読まれる。怖い

「でっ、話によると力と神器しんぎつてのをくれるみたいだけど・・・」
「あんまり、驚かないんですね？まあ、話が早くていいんですけどね」

「じゃあ、お願い」

「はい。まず、力を初めに」

あゝ眩しいなんて素晴らしい笑顔なのだろう。

バカな事を考えていると、

「では、いきますよ」

そんな事を言うと、ヘルシスさんはこっちによって来て

「ん~~~~」

え？唇にやわらかい感触が
キ、キ、キスしてる〜

「ぱっあ〜契約完了です。」

「なんで、キスなんですか〜」

俺はいきなりされた驚きとこんなきれいな人^神がキスしてくれた事の
嬉しさや恥ずかしさで混乱しながら言った。

「あ、人はキスを愛情表現でやるんですね、忘れてました。

今のは、契約のキスで神が神認者^{しんにんしゃ}にすることです。

どうですか？力が湧いてきたはずですよ。」

確かに力が湧いてきた。さっきはキスで気づかなかったけどこれは
凄いな。

契約が親父だと最悪だな。ヘルシスさんで良かった。

俺は一人で安心してると苦笑いしているヘルシスさんに手招きさ
れた。

「あの〜いいですか？」

「すいません」

「いいんですよ」

なんて最高の笑顔だ癒されるゝ

「次は、神器ですね。正和さんの神器は」正和でいいよ。」えゝ
はい正和／／／」

顔を赤くしてる。なんでだ？まあいいか。

「えつと」正和の神器はこれです。

ヘルシスさんは右手に力を込めると白い粒子が集まってきて、
一つに固まった。

その手には白色の刀が握られていた。

「これは？」

「これは、白の武器です。ホワイトウェポン」

見た目のまんまですけどね。両手出してください。」

言われた通りに両手を出すと、

ヘルシスさんが白銀の武器を粒子にして俺の手に重ねた。

彼女と俺の手の間が強く白く光った。

彼女は手を離すと「出来上がりです。」
と言ってきた。俺の体は何にも変化がない。

「何か武器をイメージしてください。何でもいいですよ。
基本的に真空の場所じゃなければ出せますよ。

一種の創造能力を武器限定にして空間に出しているだけですから」

俺は言われた通りに一本の短剣を想像してみると、
右手から何もかもが白い短剣が有った。

「すごい！」

「はい！消す方法は無くなれって念じれば消えます。
切れ味や精度は武器を想像した時のイメージが大切になります。
例えば何でも切れろって思えば何でも切れる武器の出来上がりで
す。」

武器の数などは想像の時に思ってください」
「わかりました」

俺は消えろと念じた。すると短剣が粒子に戻り、
右手に吸い込まれていった。

「なんてチート」

「はい、これは物理系最強武器ですから。他の神認者の方も持っていますけどね。」

これはほどでは無いですけどね。

あつ、でも物理以外でも空間、時空、特殊など色々ありますけど」
色々あるな。

俺はしばらくヘルシスさんと話した。

世界の名は「イニユート」と言い。詳しい事は転生した時に、勉強してくださいとのことだ。

神認者や調和者の力も転生した後で自分で見つけてくれと。

「なんで？」って聞くと、

「転生する前に教えてしまつとそれを意識してしまつて、
この世界で暴走してしまうので言えません。」

こう彼女が言っているのだからしょうがないとしよう。

転生後は記憶は残り、何かが遭ったら俺の夢の中で話ができるって言っていた。

ビックリ！

「そろそろ、行くときですね。こっちに来てください。」

言われた通りにヘルシスさんの所に行く。

「ありがとうございました。ヘルシスさん」

「いえいえ、これからお願いしますね。正和」

にっこりと微笑んでいた。幸せだ

「では転生を開始します。『空間転生術』！」

彼女がそう言うのと俺の意識が無くなり、
再び真っ黒な空間に入って行った。

神の世界（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。今回は正和が死んだ後に来た神の世界のお話です。結構重要な話でした。神認者や、調和者（世界の調和者）の説明難しかったです。改めて文才の無さを自覚しました・・・

次話は新章です。今までののはプロローグだったので、今までよりも頑張って投稿していこうと思います。次回もよろしくお願いします。

設定？（前書き）

設定です。今までの登場人物やその人達のステータスや使用魔法、登場魔物を書いていきます。あらわし方はE A S S S S S S X R 左から段々能力が上がっています。成人男性の平均がD とします。

この作品は、ギルドのランクや魔物、人、その他種族の強さでもこのあらわし方でいきます。無い場合は - で表します。
では、設定？です。どうぞ！

設定？

主要人物、その他登場人物

名 神宮 正和（男）
じんぐうまさかず

種族 人族 歳 14歳

体重 56kg 身長167cm

容姿 上の中

髪は黒の長さは首の中間くらい
目の色は黒

性格 誰かが困っていたら後先考えずに助けに行ってしまう。
女性の恋心には全く気づかない。
負けず嫌い、やさしい、努力家、朴念仁

ステータス

知力S 力A 走力S 体力A 精神B 集中A
回復C 運C

（ヘルシスから力をもらった後）

知力S 力SSS 走力SSS 体力SSS 精神B 集中A
回復SSS 運C

（魔法ステータス）

魔法量 - 、精製度 - 、操作力 - 、戦闘力C（魔法が使えないので）

属性 火 - 、水 - 、風 - 、土 - 、雷 - 、闇 - 、光 - 、無 - 、
氷 - 、時 - 、重力 - 、空間 - 、
特殊能力

ステータス

知力 R 力 R 走力 E 体力 S S S 精神 R 集中 R
回復 R 運 R

魔力量 R 、 精製度 R 、 操作力 R、 戦闘力 R

属性 火 R、 水 R、 風 R、 土 R、 雷 R、 闇 R、 光 R、 無 R、

氷 R、 時 R、 重力 R、 空間 R、

特殊能力

ホワイトウェポン

白の武器、 神気、 透し、 思考解読、 瞬間転移、 夢介入、 空間制御、
時間制御、

武器

ホワイトウェポン
白の武器

キャラ説明

正和の命を時空を歪めて短くしてしまうと言うミスをしてしまった、
かなり天然な神様。だが、神の中ではトップクラスの力を秘めてお
り、一つの世界の担当神である。ちょうど空いていた世界の調和者
の座を正和に任せ更には世界に干渉するために自分の神認者の座ま
でも与えてしまった。

モブキャラ

男の子（男）

特にないので無し

女の子（女）
特にないので無し

女のこのお母さん（女）
特にないので無し

登場魔法
・空間転生術

登場魔物
（登場しません）

設定？（後書き）

設定？でした。設定は章の終わりや、長ければ区切りのいい所でやっています。武器は5〜10個ぐらい溜まったら「武器設定」、道具は（以後アイテム）は30個ほど溜まればやろうと思います。次はいよいよ新章突入！です。

（編集して登場魔法だけ載せて詳しい設定は別に載せます）

誕生（前書き）

yuyasです。この章は正和の転生先「イニユート」も世界観や正和の力について書こうと思います。さて、今回の話は短く正和がイニユートに産まれてくる話です。お楽しみください。

誕生

暗いな。

俺は確か・・・神ヘルシスさんに神の世界だっけか？で会って・・・
しんにんしゃ神認者や調和者世界の調和者について話されて。

転生して、その世界の調和者になるんだっけか？
あれ？っつかここ何所だ？

俺はいきなりの状況に困惑していると
行き成り激しい光が体全体を包んだ。
眩しい！俺は声を出そうとすると

「おぎやああ〜おぎやああ〜」

ん？おぎやああ〜おぎやああ〜？
な、なんだ！声がおぎや〜だと！
よ、よし、れ、冷静になるんだ。
まずは深呼吸を（スーハー、スーハ）
OK落ち着いた。声出すぞ〜

「おぎやああ〜おぎやああ〜」

・・・

なんじゃと！

何の嫌がらせだ！

俺が何をした！

14歳に赤ちゃんをやらせるだと！

精神的にきついだろ・・・ごめんよ、母さん。

俺は30秒間心の中で泣き叫んだ・・・

おっと、何かがそれだな。

まず俺は、転生して・・・

あつ、そっか転生したから赤ちゃんなのか！

なる。 (どうしようかと思ったよ。良かった)

「アーサー産まりましたよ」

一人で安心感に浸っていると、

疲れきったような、だがとても美しい女性の声が聞こえた。
誰だ？

「ああ、マリアご苦労様。

この子の名前どうする？ジルも考えるか？」

今度は、遅しい男の人の声が聞こえてきて、
そのままアーサーと呼ばれる男性が俺を抱き上げた。

「うん！かんがえる。なまえはね〜、オが付くなまえがいいなあ〜」

次は、幼い感じの男の子、多分ジルって子だろう。
その子の声が聞こえてきた。

「オですか？オ、オ、オ！オルツスなんて、どうですか？アーサー」
「オルツス。いい名前だ。それにしよう、この子は今からオルツス・
ワースンだ！」
「おるっす。うん！いい、ぼくも、きにいったったよ」

三人で楽しそうに笑っている。

いいなあ〜仲が良くて楽しそう。
それで、今の状況と話を聞くと俺が赤ちゃんで、
産んでくれたのはさっきの女性マリアみたいだな。

「オルツス、これからよろしくね」

マリア女性が優しく俺の頭を撫でながら言ってくれた。

俺は新たな家族に迎えられ、
新鮮な気持ちと家族の温かさを久しぶりに感じたせいか、
ものすごく眠たくなってきた。

そして、俺はそんな気持ちを抱きながら深い深い眠りについていった。

こうして、このインUITの世界に、
神に世界の調和を任せられた一人の少年が誕生した。

誕生（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。この話では登場人物が増えます。オルツスは正和ですから、3人ですけどね。この三人の設定などはこの章の中間が終わりで設定？として投稿したいと思います。

第2章の「幼少時代」では主にこの4人＋村人＋ぼちぼち魔物で進めていこうかなと思います。増やしすぎると名前に困ってしまいますが、そこは頑張っていこうと思います！では、次話でもよろしく願います。

夢（前書き）

寒いですね。この頃、朝起きると「ぶるぶる」って体が震えます。さて、新たに投稿しました。タイトルは「夢」です。

前にコメントを頂いて、説明不足かなあと思ったので2話目の「神の世界」の補足として書かせてもらいました。では、お楽しみください。

夢

ん？ここは何所だ？

いつもみたいに真っ暗ではないけど、
どっちかって言うとも明るいな。

俺、確か赤ちゃんになってたはず。

眠たくなって寝たのか。赤ちゃんだからしょうがないな。

うん。一人で納得してみた。というか体が赤ちゃんなんだけど・・・
まあいいか。本当に、ここ何所だ？

「正和、ここですよ」

その声は数時間前に聞いた、笑顔の素晴らしいあの、神様の声だった。

「ヘルシスさん。お久しぶり？」

「お久しぶりです。正和。」

そう言っただけで、ふかふか頭を下げる。俺もつられて礼をする。

「どうしたんですか？ヘルシスさんがいるって事は、
ここは俺の夢の中ですね。」

「はい、そうです。結構大変でした。神の世界とここを繋げるの。」

軽く15年はかかりましたね」

「15年！」

ビックリした。十五年って、俺さっきこの世界来ただけだぞ。

「大変なんですよ。空間の移動は、次はすぐ来れますけどね。」

「凄いですね！まあ神だから何でもありか・・・」

凄いなあ。これしか言えないよ。神、恐るべき。

「でっ、ヘルシスさん何で来たんですか？」

「えっとですね。前、力が暴走するかもしれないからと言って
詳しい力の事言わなかったじゃないですか。」

あの後で気づいたんですけど、あんまり自分の力を知らない
他の神認者しんにんしゃの人達に襲われたり、

暴走した時に力の制御方法を知らないで、

私がある前に暴走を止められないと思っただんですよ。

なので、力のある程度の情報と、この世界の法則イニコートを説明しに来
ました。」

要するに、俺が何も力を使えない小さい時や、

力を使った時に暴走した時のために、

その力の制御方法を知らないで暴走を止められないからと、

前に俺が力を酷使し過ぎるとイニコートが、

それを拒絶して周りの自然環境が悪くなるとか言っていたから

どのようにやったら世界が拒絶しないですむかで

法則を説明するんだな

「わかりました。お願いします。」
「はい。まず、正和さんの力から言いますね・・・」

「ヘルシスさんが説明を始めてから約1時間」

長かったぜ！一通り聞いてやっとわかった。
えっとつまり、俺の力は神認者の神の1000分の1の力と、
今は封印されている世界の調和者の神の10分の1力の二つある。

神認者の力は神器俺の場合は白の武器と、
神級魔術が使えることと、致命傷だと思われる傷も一瞬で直したり、
契約した神の得意属性の魔法がとても強くなるらしい。
ヘルシスさんは全属性得意らしい。

（魔法には初級、下級、中級、上級、最上級があり、
普通の人では最上級が使える魔法の限界で、
詠唱が必要になり、

神級は文字通り神のレベルの魔法で魔術と言って神認者しか使え

ず、

詠唱が要らないようだ)

だが、いくら他の神認者達とは基本的な力では勝っていても、技能や経験の差で戦ったら即死するらしい・・・

だから、強くなるまでは戦うと言われた。

どうやら他の神認者達は、あまり積極的にに行動してないらしい。大きな行動を起こす時は神が命令を出して、神の利益になるように動くようだ。

調和者の力は6歳(平均的に自分で魔力を操れる歳)になったら封印が甘くなり、

過程さえふめば、俺でも封印を一時解放出来るようだ。

開放すると魔力がぼぼ、上限無しで使えるようになる事だ。

でも、力が暴走したりする事もあり。

それを止めるには、自分で「一時封印魔術」いちじふついんまじゅつを使わないと駄目らしい。

後で覚えさせられるようだ・・・

後の力は飢えた土地、人工的に破壊された自然の回復や、しんにんしゃ神認者の精神世界から神の世界へ干渉する力だ。

(神認者が行動した時にその行動が世界にとって、

何らかの悪影響が及ぶのなら、その神認者を倒し

その人の精神世界から直接神の世界に干渉して

神を倒すのが調和者の仕事だからだ。)

その後ヘルシスさんが神に罰を与えて反省させるようだ。
それ以外は、魔物を倒したときに出る魂憎悪を清め
清浄な魂にする事だ。

つまり、調和者の力は世界の乱れを調和するためのようなものがほとんどだ。

ホワイト・ウエボン

白い武器は前に言われた通り、

俺が思えば、色は絶対に白だがどんな武器を造れる。

後は消えろと念じなければ、武器は壊れるまで消えないらしい。

イニユートでは、色々な種族が共存しており、
(人族、魔族、人獣族、獣族、エルフ族、妖精族、聖獣族、天使族、
悪魔族) など

沢山いるようだ。陸は大きな大陸が二つあって、
他にもさまざまな島が多くあると言う。

エルフ、妖精、聖獣以外は村や町に住んでおり、

この三つの種族はそれぞれ特定の場所にいるようだ。

言葉はヘルシスさんが俺に『つやくまほつ通訳魔法』を

かけているから余計な事は考えなくていいとの事だ。

問題なのは急激に魔物の数が爆発的に増えていて、
民間の種族達が襲われたりする被害が多発しているようだ。
なので、まず神認者を倒すより先に、

魔物の数を減らせてくれると嬉しいのことだ。

だが、倒した際に出る魂憎悪が人の中に入ると、

その人は、魔物の魂憎悪に取り付かれ自らも魔物になり、
人を襲うようだ。

さらに、この世界にあまり強い負担をかけるとマナ空気中の魔力が暴れて、
自然環境を壊すようだ。

なので、この世界の人達は
まず、結界魔法を覚えてから攻撃、回復、補助などの魔法を覚える
ようだ。

これが、ヘルシスさんが一時間ぐらいかけて説明してくれた内容を
俺なりに、噛み砕いて改めて自分で自分自身に説明したことだ。

「相変わらず長いですね」

俺はもつふらふらだ。
すると、苦笑いしてから

「長くて、すいません。このくらいです。」

後は正和に「一時封印術^{いちじふういんじゅつ}」を

習得してもらうだけですね。

これは、神級なので詠唱は必要ありません。

やり方は自分の胸に魔力を貯めてそれを凝縮する感じです。

ヘルシスさんがやって見せてくれた。

すると、ヘルシスさんの体中の魔力が胸に集まっていて、

「す〜」っと息を吸ってから

『一時封印術!』

と言った。

すると、白い力がその魔力を上から飲み込んだ。

パチパチ〜、拍手! 凄いね〜

「さあ、正和もやってみましょう」

「OKです」

俺は集中すると赤ちゃんの小さな体の魔力が胸に集まってくる。

そして・・・「一時封印魔術!」

と叫ぶと、俺もヘルシスさんと同じように

白い力が集っていき魔力を飲み込んだ。

体に感じていた魔力が無くなった感じがする・・・

「このくらいですかね。言う事は言いました。『一時封印術』は、一時間ぐらいいしか効かないので、使ったのを感知したら私が『封印魔術』を

掛けに行きますので」

「わかりました。ありがとうございます」

「あつ！時間の事言うの忘れてました。イニユートの時間は前の^地世界と同じです。

正和さんが産まれたのが夜だったので、産まれた後日の朝ですね
イニユートの事をよろしく願います」

「はい、頑張ってください」

「はい 頑張ってください」

彼女がそう言いいい、ニッコリと笑うと

「『^{くつかんいどうまじゆつ}空間移動魔術』」と言うと、

俺の夢から消えて行った・・・

しばらくすると、何所からかやさしい声が聞こえてきた。
それは昨日聞いた。俺を産んでくれた新しい母の声だ。

目を覚ますとここに^{インターネット}来てからの始めての一日が始まった。

夢（後書き）

どうでしたか？2話ではわからなかった事がわかってもらえていたら嬉しいです。

前書きでも書いた、コメントを頂いた事なんですけど・・・とても参考になりました。ありがとうございます。

私は始めて小説と言うものを書くので色々と気づかないで投稿してしまつて、後で「あ、」ってなる事が多いのでコメントで指摘くださつて、とてもありがたく思います。

他の人々も気になる事や指摘などあればコメントをよろしく願います。

最後まで読んでくださつてありがとうございます。

5年後　　前編　　（前書き）

6話目の投稿です！いやぁ～本当に寒い。風ひいちゃいました。

さて、私の私情はここまでにしてこの話の説明です！

タイトル通り5年後です。速いですね。のろのろ書いていくよりも、
速く正和オルツスの活躍を書いた方がいいかな～と思ったので一気に5年も
進めちゃいました！と言う事で結構、幼少期の展開は素早く書こう
かなと思います。

この話は、なんと！ヒロインが登場します！どんな子かは、この
話を見て下さい！では、お楽しみください！

5年後　～前編～

「ふあ～」

ぼくは大きな欠伸して起きた。

現在7時30分、日付けは12月25日の505年です。

あ、今日僕の誕生日だ。

プレゼント～

ベットから飛び起きて周りを見る。

「あつた～！」

見つけた！ベットの下に5角形の小さなケースがあった。

それを開けようとしてケースを持ってみる。

すると、箱の側面に一枚の紙が挟まっていた。

？なんか書いてある。母上の字だ。

読んでみよう・・・

オルツス誕生日おめでとう。

今日はあなたの5回目の誕生日ですね。おめでとうございます。早速ですがこの紙を見ているって事は五角形の箱を持っていますね。その中に入っているのはネックレスです。なぜ行き成りこのプレゼントを渡したかと言うと、

ワースン家のでの決まりで男の子の場合5歳の誕生日の時に、
ネックレス

それをその子が起きた時に渡すというのが決まりになっています。

お母さん達は今日のあなたの誕生日パーティーの準備で王都へ買い出しに行っています。

なので、私達はお昼まで帰ってこれません。

少し寂しいかと思いますが我慢してください。

下の部屋にはウールがいるのでウールと遊んでいてくださいね。

朝食は空間庫くうかんこに入っているのものでそれを食べてください。

ご飯を食べている時にさっきのネックレスをかけてみてください。

それでは、今日の誕生日パーティー楽しみにしてくださいね。

なるほど、母上たちは買い物に行ったのか。

そういえば、さっきは浮かれていて考えて無かったがもう3年か、この世界に來たのは・・・

そうだな、何にもやる事無いし、腹も減ってないし今までの事を振り返ってみるか・・・

ぼくの名前は神宮正和で地球という世界に住んでいた。

でも、14歳の時にぼくは人を助けて死んでしまった。

だけど、目を覚ますとそこにはヘルシスって言う神様がいて、

ぼくにその人は神認者^{神 しのにんしや}と世界の調和者^{せかいのちやうわしや}の力をくれて、

僕はヘルシスさんの神認者と、この世界の調和者っていう形でイン
ユートに転生してきた。

僕が産まれたのは、ワーンソン家だ。

父上のアーサーがぼく達の住む大陸マーズの南の森にあるイチイ村
と言うところの領主をしている。

ワーンソン家は中流貴族でそこその権力をもっていて

結構大きい屋敷に住んでいる。

家族構成は父がアーサー、母はマリア、兄はジル、そしてぼくオルツ
スだ。

さらにペットを飼っていて名前はウールだ。

5年間であつた事は色々あるから気が向いたら思い出してみよう。

父上はさつきも説明が貴族だ。背は180前後くらいで金色の髪
と、

同色の目をしている。この世界では目や髪の色が様々ある。

顔はイケメン過ぎるくらいで26歳だ。

母上は元平民だが魔法学校に通っていて、
学年では主席を取るほど優秀な魔法戦闘師だ。

父上とは学校の在籍中に知り合って、父上の一目ぼれだ。
その後に色々とおったみたいだが、うまくいって今ではラブラブだ。
色々とおった事は今度話そう。

背丈は165前後、金色の髪と赤い色の目が特徴で、
ヘルシスさん並の美貌。26歳。

兄上のジルは父と同じ目と髪を持っていて、

ぼくの事を大切にしてくれるとっても優しい兄だ。

兄上はワースン家を引き継ぐ事が決まっていて後3年したら、
父上と母上の行っていた学校に入ることになっている。

背丈は140前後だ。

幼いながらも村の女の子に20回も告白されている。

イケメンだ・・・そこは気に入らない・・・今9歳だ。

ぼくは、さつきも行ったが転生者でこの世界の調和者であり、
ヘルシスさんの神認者だ。

金色の髪と左に金色の目、右に赤色の目のオッドアイだ。

この事は、家族にしか知られて無い。

父上がぼくが産まれて、その事に気づき左目に「変色魔法」^{へんしよくまほう}を
掛けたため知られずにすんだ。

オッドアイはこの世界での「神災」^{しんさい}を

意味していてあまり良く思われていない。

なぜ、一人称が俺からぼくになったかと言うと、
前に俺って言うたら・・・母上が泣きながら

「オ、オルツスがふ、ふ、不良になっちゃった」

と言いながらぼくをぶらぶら揺らすから・・・

それがトラウマになってしまい、今ではぼくになっている・・・

いずれは俺に直すつもりだ。

ぼくの背は100前後だ。

ぼくの神器しんぎの白ホワイトウェポンの武器は、

まだ使っていない、産まれた日以来ヘルシスさんは夢の中に現れて
いなくて、

何も出来ない状態だ。もうちょっとしたら、

兄上が今、父上と鍛錬をしているから、

僕も鍛錬を請けれるように頼もうと思う。

頑張ろう！

ウールはワールソン家で飼っている。獣族の狼族だ。

獣族は地球という動物みたいなものだが、高い知能を保有していて
もっとも高いものでは人型になれるほどである。

人獣族は人族とこの獣族（人型になれる）の子供である。

獣族はよく、使い魔と呼ばれる。元は父上の使い魔だったらし
いが、

今はペットになっている。何でかは次の機会で話そう。

体長は90前後で耳がもふもふしていて可愛いし温かい。

凄く気に入っている。

「ふぁ〜」

また、欠伸が出たよ。このくらいかな？

お腹空いたな〜ご飯食べよう。

その時にプレゼントのネックレスを見てみよう。

ぼくは服を着替えてウールの居る1階の居間に下りて行った。

「がうがう〜」

居間に下りるとウールが吠えながら、こっちに寄って来た。

「おはよう、ウール。僕たち昼過ぎまで二人だよ」

そう、問いかけると・・・

「がう!」

と、返事をしてくれた。本当に頭が良いんだな。

ぼくは関心しているとウールが、

ぼくの分と自分の分の朝食を持ってきてくれた。

「ありがとう、ウール」

「がう〜」

撫でてやると、ウールは気持ちよさそうに目を細めて、
吠えてくれた。

今日の朝食はパンとハウイ兎のソテーと水だ。
（ハウイ兎は魔物である。魔物は倒した後に浄化すれば食べれる。
結構おいしい）

「いただきます」

ふう、食べ終わった。美味しかった。

「ご馳走様でした」

「がう！」

よし、ネックレスをかけてみよう。

ぼくは五角形の箱からネックレスを取り出し、首にかけてみた・・・

「どう？オルツス？」

ん！？お、お、女の子の声が聞こえる。

ぼくは声のしている方を向くと、そこには・・・

「・・・え？」

そこには、可愛らしく首を傾げている狼型の獣族のウールがいた！

「おっ！その表情は聞こえているね。やった〜！

「そっだよ！私ウールだよ」

テンション高いね」

「なんで、喋れるの？」

「えっとね、マスターがそのネックレスかけたから」

うん、答えになってないな」

「でも、今外してるよ」

「うんとね、さっきネックレス付けてたときに契約したから・・・
婚姻の・・・ぽっ／＼／」

「なんじゃとー！！！」

ぼくは子供らしからぬ声を張り上げた。

こ、こ、婚約だどー！？

しかも、「ぽっ／＼／」ってなんだあー！

っ！か、どうやってたら婚姻が今の状況と繋がるんだ！

「はあ、はあ、はあ」

「お、落ち着いて。じよ、冗談だよ」
マスターとはいずれはなるけど・・・ぽっ／＼／」

だから、「ぽっ／＼／」ってなんなんだあー！
ん？話がそれてるな。

「もう！マスター！話それちゃったじゃないですか！」

ぼくの頭から・・・ピシッ（キレタ音）

「お前のせいじゃろおっ！」

その後ウルとオ・ハ・ナ・シをしました。

5年後　く前編く（後書き）

どうでしたか？ヒロイン。結構ボケさせました。正和オルツスには突っ込みを担当してもらいます。今はヒロインって感じはしません！色々頑張らせます。次の話はこれの続きです。後編ですね！今度は少しウールの過去を混ぜてみようかと・・・ネックレスも次で説明します。

感想、又は一言お待ちしております。

最後まで読んで下さってありがとうございます。

5年後　く後編く（前書き）

こんにちは！いつも見て下さってありがとうございます。
7話目です。前回の5年後　く前編くの続きの後編です。ではどうぞ！

5年後　　後編

皆さん、こんにちはオルツス・ワーソンです。

あ、本当は神宮正和ね。

やあゝ死んだあの日から驚く事多いやゝ

なんと！飼ってるペットが喋っちゃったよ。

まあ、色々話したから聞いて下さい。

あゝ久しぶりにキレタな。

うん。でウールに（喋ったペット）

お話というなの、イライラ発散をした。

大丈夫だ！暴力は使っていない・・・こちょこちょして気絶させたけど・・・

しばらくしたら気絶していたウールが目を覚ました。

「マスター酷いよ。傷ものになっちゃったよ」

お嫁に行けない」

「お前が悪い。ふざけ過ぎだ！」

ぼくは、いかにも怒っていますよ雰囲気と言っているのに・・・

「マスターのせいだよ。マスターがもらってね。キャフ」

そう言うとうールは顔を赤め。モジモジし始めた。

こ、こいつは強敵だ。一切ぼくの言う事に耳をかさない。

・・・しょうがない。

「そこは、後にしてまず、ウールの正体は何なのか言ってよ。話が進まない」

「もう、しょうがないな。マスターは、いいよ、私の正体からだね。まず人型になろうか」

ん？人型だって・・・！

え！？人型ってかなり知力の高い獣族じゃないと出来ないはず。もともと、ウールは狼型の獣族だから。

たしか、狼族は獣族の中でもかなり頭のいい方だけど・・・なれるのは、フェンリル種だけだったはず。

でも、フェンリル種はかなり大きかった。

ウールみたいに小さくない。

そんな事を考えているうちに、ウールは白い煙に包まれていく・・・

やがて、ウールは煙に包まれ、ぼくは視認出来なくなった。

「どうかな。マスター！うふふふふ」

煙がだんだん晴れてきた。

と言うか、ウールが言葉から興奮と言うなの感情がみえるんだが、

なんで、コイツ興奮してるんだよ・・・

は、確かこういう感じになったら出てくるのは大抵・・・

裸の女の子！

まずい！

大変な事に気づきその場から立ち去ろうとすると、

「ガシッ」

誰かがぼくの肩を掴んでいる・・・

これはホラーですか！？

マジ怖い、マジ怖い、マジ怖い。

恐る恐る、後ろを振り向くと・・・なんと！そこには

「桃色の桃源郷が！」

「アホか！心読んでるんじゃないねっ！」

ウールを叩いた。

確かにそこには桃色の桃源郷が見えたけど・・・

「痛いよ〜マスター〜酷いよ、正体を見せたただけなのに・・・」

やあ〜確かに今のは心読まれたただけだから、

ウールはそんなに悪くないんだが、マジ怖いんだぞ〜

「ごめん。やり過ぎた」

「ニヤリ、じゃあ〜マスター私の胸に溺れて！」

「なぜ、そうなる！」

今度は殴りました。

ウールは部屋の片隅で丸まってます。

衝撃的過ぎた。

だって今のウールの姿は官能的過ぎる・・・

歳は15〜16位で背は170前後、

髪はウールの狼型の時と同じ毛の銀色、

目は赤い。

スタイルは出るとこは出て、絞まっているところは絞まっている。

ナイス！って言いたくなるだろう。

だが！今のぼくは5歳児だ。

精神年齢は19だから結構やばかったが、

この体に影響されて興奮はしない。

始めてこの体で良かったと思う。

あのままだったら、ぼくの理性の鎖が千切れ・・・

考えただけで恐ろしい。

「もういいから、服着て」

「わかったよ、マスター。でも服どこ？」

あれ？確かに考えてみたら服無いな。

母上の部屋に行くのはさすがに不味いし、

ぼくの服だと今よりもエロくなる・・・

困った・・・

「やっぱり、このままで！」

「だめだ！」

なぜ、そこで顔を明るくする。

「そうだ！」

思いついたぞ！この力を使ってみよう。

服も戦闘向きにしたら武器になるはず！

ぼくは、早速手に力を込める。

イメージするのは・・・

（戦闘向きの絶対に切れない布製の服）

イメージすると、ぼくの手には白い粒子が集まってきた。
段々、形が構成されてきた。

「ピツカツ！」

と強い光がぼくの手の手ひらから出てきた。

光が無くなると、ぼくの手には白いシャツと同色のズボンがあった。

「とりあえず、これ着てウール」

「うん」

ここまでが長かった。疲れたぜ。

でも、初めてだったけど使えたな。

ホワイトウェポン
白の武器

これは今、消したら大変な事になるから

ウールが狼型になったら戻そう。

じゃあ、話を聞くか。

「さあ、話してもらおうよウール」

すると、ウールはさっきまで、

ふざけていた奴は思えないほど、真剣な顔になって言った。

「わかったよ、マスター。」

まず、私の正体だね。私はマスターも勘付いている通り、
フェンリル種だよ。それもかなり上位にいる」

「?なんで、ウールはこんな家のペットになっっているんだ?」

そうだ、フェンリル種は魔物とは違うが基本的には、森などで集団で暮らしている。

しかも誇りが高く、使い魔として召喚されても

契約を拒み、始めは戦闘を行い勝利し、主を認めないとそのまま、逃げられてしまうのだ。

たとえ、契約をしても主以外の言う事は聞かない。

だから、フェンリル種はこの様な家でペットになっているのは有り得ないのだ。

でも、ウールは家族みんなの言う事を聞いている。
なぜだ?

「ペットじゃなくて家族ファミリーと言って欲しいな」

そう言ってニッコリと微笑む。

若干ふざけてる感があるけどそのままにしよう。
話が進まない。

「わかった。じゃあどうして家族に?」

「うん マスターはアーサーが」

私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚したのを知ってるよね」

父上のこと思いっきり呼び捨てだよ...

まあ、いいか。

ん?気になることがあったな。

確か「私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚した...」

「おかしくないか?だって、父上が召喚したのは確かに狼型の獣族だっただ、

それってウールの事じゃないのか？」

すると、首を振って

「違うよ。アーサーが召喚したのは私のお母さん」

「そうなのか。で、なんでこの話と繋がる？」

「繋がり？繋がりには、簡単だよ。

私のお母さんがアーサーの事を気にいちゃって

そのまま・・・その間に」

「え？それって母上のこと？」

まずくない？したらばくって人獣族に分類されるよね。

「違うよ」そのまえにフェンリル族は精が無くても子は産まれるから」

良かった。でも精を必要としないって、生き物で有り得るのか？

「OK。まずはそこを置いておこう。

また話がそれたな、

ウールのお母さんが父上とどうなったの？」

「私のお母さんがアーサーの使い魔って事までは言ったね。

それで、アーサーの事を気に入ったお母さんは、子を作ろうとしたんだけど、

そのときにアーサーがマリアのこと好きで、断ったから自分で子を宿し産んだって訳で、それが私」

父上やるな」母上を選んで振ったんだ。男前だな。

「でも、それじゃあウルのお母さんは何所に行ったの？」

「私のお母さんは、死んじゃったんだ・・・」

「ごめん。それはわかったけど」

それがどうしてウルがここにワートン家にいるのに関係してるんだ？」

「それはね。お母さんが死ぬ間際アーサーに」

「私の子を貴方の子のお嫁にいかせるね」って契約したんだよ。
無許可で」

「何で無許可！？勝手に契約は不味いだろっ」

「いいんだよ。それでアーサーは私の事をお母さん自分の使い魔の子だからってことでこの家にいるんだよ」

なるほど、そんな事があったのか。
でも、あのネックレスは何なんだ？

「あのネックレスは？」

「あのネックレスは、お母さんが「錯覚魔法」をかけて、
5歳になるとあげるって事をワートン家の決まりにして、
ネックレス自体は私との契約」

「マジですか。」

でも、兄上は反応しなかったんだろう？」

「そうだよ。ジルでも良かったんだけど、

こうやって喋れなかったから私が拒否したの。

マスターはただの子供じゃないし」

え！？驚いた。コイツは気づいてる！

試してみるか？

「何言ってるんだよ。ウルばくはただの子供だよ」

出来るだけ平然と答えてみるが・・・

「嘘は良くないよマスター。
お母さんが私の為にある程度知識を残してくれたから
わかるけど、マスターの魔力は2つの異様な力で出来ているのが
わかるもん」

さすが、フェンリル種だな。知力は人よりあるな。
どうする？ここで言うか？
どうやら、どこへ行ってもウールは付いて来るし、
フェンリル族はかなり強い。
本当の事を話して完全に味方に付けるか？
さっき、知識ももらったって言っていたから
相談できる事は多いかもな。
ここは乗るべきだ！

「・・・そうだよ。ウール、ぼくはただの子じゃない」

「やっぱりね。どうせ神認者^{しんにんしや}かなんかでしょ」

そこまで気づいているのか。さすがだな。

「うん。ウールの予想通り。ぼくは神認者だ」

そう告げると、ニコニコして笑いかけてくる。

「OKだよ。マスターこれからよろしくね」
「ああ、よろしく」

「で、ウール小さくなれる？」

「ん？出来るけど、どうして？」

ぼく達は話をこんな感じで続けていた。

「色々と目のやり場に困るから・・・」

そうなのだ。今のウールは目のやり場に困る・・・

だって、見た目15、16のウールが、

ぼくの簡易で作った白の服を上下に一枚着てるだけ。
後はご想像にお任せします。

「わかったよ。マスターどのくらいがいい？」

「じゃあ、ぼくと同じ年くらいで・・・」

「え、もしかしてマスターはロリ

「ちよとまったロリコンではない」

良かったよ。ウールは心配したのだ」

本当にぼくはロリコンではない。

そんな事を考えていると、ウールはいつの間にか

ぼく位の背丈になっていて顔も少し幼くなっていた。

あ、やばい服作らなきゃ。

そう思っ、ぼくは服創造に取りかかった。

これから付いて来てもらうから、簡易じゃない方が良いか。

一応女の子だし、ズボンタイプよりもドレスっぽい方が良いし、

肌着は無理だな。色々は無理だ。勘弁してもらおう。

（さっきより小さくて、機能性は絶対に切れない耐久性、

短縮自在でこれからウールが大きくなっても着れて、人型になった時のみ現れる。

デザインは下は膝までの丈のドレスみたいの・・・）
そう思つて作ると膝位までの丈の白のドレスが出来た。

「ウール。これ着て」

そう言つてドレスを渡す。

ウールは嬉しそうに着てくれた。

しばらくすると・・・

「「「ただいま」」」

皆が帰ってきたようだ。

今日はぼくの誕生日パーティーだ。さあ、楽しもう！

5年後　　後編　　（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。今回の話はどうでしたか？書いてて自分も、ん？って思ってしまった・・・意味の分からないところや誤字、脱字がありましたら一言でお願いします。他にも感想お待ちしてます。

次話はワースン家の皆にウールの事を説明し、オルツス正和の誕生日パーティー会の話だと思います。では、ありがとうございました。

誕生日パーティー（前書き）

みなさん、こんにちは！いつも見てくださってありがとうございます。

今回は、主人公オルツスの誕生日パーティー回です。

でも最後には……ってな感じです。今回のウールは少し大人かもしれません！では、お楽しみください。

誕生日パーティー

母上達が帰って来た。

ウールの事を見て、皆驚いていた。

その後、ゆつくりと紅茶を飲みながら例の子の話をした。

なぜか父上は話を聞きながら顔を青くしてぶるぶる震えていた。

母上はニツコリと笑いながら、

こめかみに怒りマークを浮かべていた・・・怖い・・・

兄上は何か、今日の王都への買出しで心身ともに疲れている様子で、話を右から左に受け流していた。

話の途中ウールがぼくの正体を言いそうになったが、ぼくが白針を創造してウールに投げつけて口止めた。

こんな事があったが、皆わかってくれて

ついでにぼくが旅の出来る歳になったら一人旅を試みたいと言った。

あっさりと了承してくれた。

母上は若干ぼくを涙目で睨んでいたが・・・

そして、嬉しい事に旅に出るなら父上が兄上と、

一緒に鍛錬をやってくれると言ってくれた。

（PM 17:30）

まあ色々な事があつたけど

今では皆ぼくの誕生日パーティーの準備をしている。

ぼくがここに来る前に思っていた貴族のお堅い感じのパーティーでは無く

ここでは村の人達が屋敷に集まってくれて村人皆が祝ってくれる。

前に村人の人に聞いてみたが、

こんな風に皆で集まってこういう事をするのは珍しいし、

さらには自分達の誕生日パーティーを父上は開く事も凄いと云っていた。

そんな事もあり皆ぼく達に、とても良くしてくれる。

とってもいい村だ。

皆、せっせと働いている。

ぼくも手伝おうとしたんだが、

「坊主は働かないで遊んでくれ」

と言われる。しかも坊主・・・

まあおっちゃん達はみんな、坊主って言うからしょうがないか・・・

・

そんな感じで今はウールと遊んでいる。

ウールは今は狼型に戻っている。

村の人達に見つかったら少しまずいから・・・

しばらく遊んでいると兄上が来た。

「オル、もう少しで始まるから来て」

兄上はぼくのことを「オル」と読んでいる。

「わかったよ。兄上」

しかも、ぼくの家はなぜか敬語を皆使わない。
さすがに、王都や他の貴族の集まりの時は使うが。

（PM19：00）

「皆さん、私の息子オルツスの
誕生日パーティーに来てくださってありがとうございます。
今夜は息子の誕生日ですが、沢山の料理も用意しています。
ぜひ、お楽しみください！」

父上の挨拶でぼくの5度目の誕生日パーティーが始まった。

（PM20：30）

挨拶の後ぼくは色んな村の人達と話しかけてくれた。

「大きくなっただな」坊主。誕生日おめでとう」

「オルちゃん、誕生日おめでとう」

「オルツス、おたんじょうびおめでとう」

などなどだ。上からおじさん達、おばさん達、村の子供達だ。なんて温かいパーティーだ。涙が出そう・・・

パーティー会場から1キロぐらいの場所で感動に浸っていると、後ろから誰かが抱き付いてきた。

「マスター私がお祝いにチューをして上げるよ」

どうやらウルらしい。

それに人型になっている。

それに、歳は10代中間くらいだな。

なんでわかるかって？それはなあ

ぼくの背中に大きなメロン二つが当たっているからだ！

「ウル。色々と恥ずかしいからやめて。後、皆にばれる」

「良いじゃないか、遠いし絶対見えない。

しかもいずれマスターと披露宴を挙げるんだから」

「ベシッ！」

ウールを叩いた。コイツは本当に懲りないよなあ」

「冗談はやめとけ」

「冗談じゃないよマスター。結構本気！」

「もういいや。疲れた。」

そう言い残し、ウールを放置して屋敷に戻っていく。
行くときに

「えっ！？マスター乗ってくれないの！」

と、聞こえたがそこはスルーでいこう。スルー。

え？お前の誕生日なのに居なくて良いのかだって？

良いんだよ。村の大人達や父上はもう、お酒のせいでベロベロだし、母上は村の女性達に色々と話してる。

兄上は他の子達と遊んでいるから。

いまいち、子供の遊びが分からないんだよ・・・

いやあ、そりゃね。ぼくの精神年齢は19だよ。

つばがわからん。つばが。

寝るか。

そう思っパジャマに着替えようと自分の部屋に上がろうとすると・

・

「きゃあああああああああ」

村の方から悲鳴が聞こえてきた！

なんだ？何があった！？

ぼくはあわてて家から飛び出した。

「マスター乗ってく？」

「ウール？なんで大きくなってるの？」

そう、そこにはいつも見慣れているウールではなく、二まわりほど大きくなった白銀の狼がいた。

今ぼく達はさっき誕生日パーティーをやっていた広場に向かって走っている。

走っているのはウールでその後ろにぼくが乗っている。

ウールはいつもの愛らしさが無くなり、

前、自分の正体を明かした時よりも真剣な表情で走っている。

ウールはかなり巨大化していて、全長が3メートル位ある。

なんで大きくなったのかは分からない。

聞きたいが、今はそれどころでは無いだろう。

今のウールの時速60キロ位だ結構速い。

広場までは後2キロほどだ。

「ウール急ぐんだ！」

「OK！マスター掴まってね」

そう言うとウールはまたスピードを上げた。

ウールがスピードを上げるとすぐに着いた。
まず、状況が分からないから、木陰で様子を見るか。

「ウール。あの木の陰で様子を見るよ」

ぼくは50メートルくらい離れた、
見晴らしの良さそうな木を指差しウールに言った。

「分かった！」

そう言っただけウールは木陰に入った。
そして、広場の様子を見ると・・・

「何！」

ぼくは驚いた。
そこには、多くの魔物たちがいたのだから。

そこには、沢山魔物がいた。
村の男達は戦っているが、酒のせいで思った通りに体を動かせていない。
女性達は怯えていて動けそうに無し
同じく子供達も固まっている。

でも、兄上が見えたからしばらくは安心だろう。
問題は今、最前線で戦っている、父上と母上だ。
二人は確かに強い。

だが周りに村があるから、全体に効く魔法は使えないようすだ。
二人は魔法剣を出して戦っているが明らかに押されている。
（魔法剣は属性魔力を具現化した剣。）

「グワアアアアアア！」

今、村人が魔物の牙の餌食になった。
まずいなあゝこのままだと、全滅させられる。

それに魔物はそう簡単に殺せないのである。

魔物には魂の塊憎悪があつてそれが生物の体の中に入ると、
その生物が魔物になってしまうからだ。

だから、基本的に魔物を倒すときは一体に当たり二人で戦うのだ。
一人が魔物を倒し、もう一人が魔物の魂憎悪の浄化をやる。
こうしないと、倒しても逆に魔物が増えてしまうのだ。

いつもなら皆が協力すれば倒せたはずだ。
だが、今は夜陰であり、さらには酔っていて協力もくそも無い。
しかも、この村にはしばらく魔物は襲つてこなかった・・・
襲ってきたのは父上がこの村に来るずっと前だって聞いた。
だから、シュミレーションと言うものが出来ていないから、

こういう状況での対応が出来ない。

どうする？ぼくには神認者しんにんの力がある。

けど、まだ普通の魔法ですら使えない

ぼくには神認者本来の力。神級魔法が使えない。
どうやればいいんだ？

「マスター・・・悩んでも始まらないよ・・・

マスターが本来の力をまだ使えなくても、
私の服とか造った力はあるでしょ」

「ウールの言う通りだけど。

君の服を造った力だって使いこなせない・・・」

すると、ウールはいつの間にか人型に戻っていた。
そして・・・ぼくを抱きしめて、やさしく・・・

「いいじゃないですかマスター。マスターの造った

この服は万能ですよ。私が狼に戻ったら消えてるし、
人になったらなぜか元通り、

しかも、いくらひっぱても爪で引っかいても切れない。
凄いじゃないですか」

「・・・お前、そんな事してたのか」

せっかく造ってやったのに。

でも、今のウールの言葉を聞いて自身は出てきたな。

「ありがとう。ウル」

「はい。私はこのままここにいますね」

「ああ、助かる。危なくなったら助けてくれ」

「OKです」

こんな感じでラブコメ？をしていると、
いつの間にか村の女性達の所に魔物が集まりだしてきた。
どうやら押し切られたらしい。

「よしっ！」

ぼくは気合を入れると白い長剣を創造し、
魔物達の元に駆けて行った！

誕生日パーティー（後書き）

どうでしたか？今回は？書いてて結構、悩みました。魔物もつと後に出そうかな〜って思っていたんですが、戦闘の描写速く書きたいなあって思っていたのでこう言う展開になりました。

と言う事で次話はオルツスの初戦闘です。^{正和}神級の魔法や、世界の調和者の力は出ないと思いますが、白の武器で頑張ってもらいたいと思います。

では、最後まで読んで下さってありがとうございました。次話もよろしく願います。

24年1月4日にウールの獣化した姿を銀から白銀に変更しました

初戦闘（前書き）

こんにちは！この日2回目の投稿です。8話書いた後にアイディアが沸いたので書いてみました。今回は戦闘です。では、お楽しみください。

初戦闘

ぼくは、魔物に駆けて行って、

今にも食べようとしていたから白い長剣で首を切り落とした。

魔物は「グオオオオオオオオオ」と変な断末魔を上げ死んでいった。

「オルちゃん！」

村の女性達がぼくに気づき声を出した。

だが、ぼくはそれを無視する。

そして見たのだ魔物の背から黒い塊が出てきたのを

（あれか・・・あれが魔物の魂^{憎悪}か・・・

見るからに悪の塊って感じだな・・・さて、どうやって消すか。

確か通常では浄化魔法を掛けるんだったよな？

でも、ぼくはそれを使えない・・・だが、消す方法はあるはずだ！

！そうだ！浄化をイメージした武器を造れば）

ぼくはそう思い、浄化をイメージした。

（浄化だ、浄化。きれいにするイメージだ。

そして、出来るだけ離れた方がいいな。

なら、銃タイプだ。使った事は無いが使えるはずだ。

さっきだって、剣を使った事が無いのに使い方が頭に浮かんできたのだ！）

浄化効果があり・・・連射が出来き、さらに、距離が開いていても当たる銃！

そうイメージすると、

ぼくが知っているような形の白い銃が左手にあった。
それを見てすぐに黒い塊に打ち込んだ！
すると、黒い塊は見事に当たり白くなって消えていった・・・
よし！いける。

ぼくは、魔物に近づいては斬るを続けて行った。
どうやらこの体は前よりもスペックが高いようだ。
体が風のように動く。
次々に魔物が倒されていき、その背中からは黒い塊が出てくる。
ぼくはそれを狙って白い銃の引き金を引く。

やっと、最後の魔物になった。
魔物
そいつを倒そうと首に切りかかるが・・・

「ガツキイイン！」

「っ！」

なんと、その魔物は刃を弾いたのだ！
その衝撃で刃は折れてしまい、
さっきまで使っていた白い長剣は白い粒子に戻り消えてしまった。
次の瞬間、魔物が反撃してきた。
危うく、爪の餌食になるところだった・・・

ぼくは距離をとるように、銃弾を撃ち続け魔物から一旦離れる。
離れながら見ると、いままで倒した魔物は熊みたいな魔物だ。
確かに、今の魔物も熊みたいだが少し違った・・・
その魔物には全身が光輝いている。
それは鋼鉄で出来ているようにも見える。

そんな事が分かって弱点を探そうと撃ちながら
離れてみるが、甘かった。
魔物は銃弾をくらっても特にダメージが無いみたいで、
撃ち続けているのを無視しそのまま突っ込んできた！
まずい！浄化と距離しかイメージしていなかったせいで威力が欠けている。

そして、ぼくは魔物に殴られた。
「ボッン！」
と鈍い音を出してぼくの体は10メートルほど飛ばされ
木にぶつかった。

「がはっ」

吐血した。

まずい！このままだと。

こうしてる間にも魔物は足に力を込めてぼくを殺そうとして来る。

魔物が動き出した。

銃もぶっ飛ばされたときにどこかにいつてしまった。

さっきみたいに銃で牽制も出来ない。

魔物が突進してきた。

ぼくはとっさにそれを横にかわした。

魔物はそのまま突っ込み木々を折りながら進んで行った。

だが、安心がしてはいけない。

すぐに戻ってくるな。

一つ良かった事は周りに村の人達は見えないことだ。

魔物とやりやっている間に遠い所に来たのだろう。

これで気にしないで戦闘が出来る。

急いで武器を造ろう！

ぼくはイメージする・・・

（全てのものを切り裂き、

どんな反動にも耐え、

魔物の血肉を喰らいその力も飲み込む

鋭き刃、強固な刃、全てを飲み込みそれを力に変える刀！

イメージするとぼくの手には、

沢山の光の白い粒子が集まり、

徐々にその刀身があらわになっていく・・・

でも、魔物は待つてくれなかった。

そう、魔物が折り返しこっちに向かってきたのだ！

まだ刀は出来ない・・・

多くの力、さらに強力な能力を求めたため創造に時間がかかるのだ。
魔物が迫ってくる、

「くそっ」

次の攻撃はヤバイアイツは

魔物

思いつきり爪を立てて切り裂こうとしている！

ヤバイな。刀を見るがまだ、刃先が造られていない。

絶体絶命だ！

さあ〜どうする！

魔法！

そうだ！魔法がある。

だが、どうする？

ぼくの知っている魔法は・・・

あつ、あつた！

前に父上と兄上が鍛錬した時に魔法を使っていた。

でも、出来るのか・・・

5歳児の俺には魔力のコントロールが出来ない・・・
でも・・・

・・・やるしかないじゃないか！

ぼくは覚悟を決め、言葉を紡ぐ。

「火よ、集まり、一つの塊になり進め！『火の玉』！」

そう、詠唱するとぼくの目の前には、

1メートルくらいの大きな火の玉が出来た！

ぼくは「行け！」と叫ぶ！

すると、火の玉は進んで行った。

魔物は行き成り現れた火の玉に驚き、
急停止し、危うくかわす。

そして、また進もうとして来る。

だが、もう遅い。

ぼくの右手には刃渡りが90センチぐらいある、美しい刀身の白刀が握られている！

ぼくは走る。さっきよりも速く！

向こうも突進してきているので、

すぐにたどり着く。

向こうから攻撃して来た。

爪を立てて切り裂く攻撃だ！

「ギイイイイン！」

ぼくは刀を盾のようにして爪を受け止める。

凄いびくもしない。

ぼくは刀を押し出すようにして爪を弾く。

「次は、こっちの番だ！」

そう言い、熊の魔物に切りかかる。

魔物はかわそうとするが、

かわしきれない。

そして、魔物の右腕を斬った。

「シュパ」と切れる。

魔物は距離をとろうとする・・・が、
ぼくはすぐに追いつき連続で切りかかる。
左手首、右肩、左肩と切れば切れほど、
この白刀は切れ味が増していく。

もう、魔物はほとんど動かない、いや、動けないのだ。
魔物はもう、足も切れているからだ。
ぼくは、止めをさそうと、
魔物の首に狙いをさざめて切りかかろうとするが・・・

「がはっ」

再び吐血した。なぜだ？
くそ、気にしてる場合じゃねええええええ！

正和
オルツスはまた、足に力を込めて駆ける。

その足はもう、ふらふらで、今にも倒れそうだが、オルツスけて少年は倒れない。

刀を不気味に光らせ魔物の命を絶つ。

「グワァァァァァァァァァァ」

魔物は断末魔を上げて死んだ・・・
そして、その背中からは黒い塊が出てくる。
それを今、創造した白い銃で撃つ。

「パアーン」

銃が乾いた音を出す。

魔物の魂は消えていった・・・

ぼくは今、魔物を殺した山道で寝転んでいる。
なんで？つて、動けんのだよ。

それに、さつきから違和感がある。

こう・・・なんていうか・・・

体の中心から何かが沸き出てくる感じ？

まあ、普通に気持ちが悪いと言う事だな。

でも、どうしよう？

このまま動けないのは危ないな・・・

本当にどうしよう・・・

「マスター。終わった？」

あのバカウールの声が聞こえた。
アイツのんき過ぎだろ。

マスターって呼んでるんだから少しは助けたりしようぜ・・・

「マスター、お眠かな？」

目を開けるとそこにはウールがいた。

「おい、なんで助けなかった？」

そう、問いかけると・・・

「マスター、一人でも倒せるじゃないか」

「そう言う問題じゃねーよ」

「そう言う問題だっぞ」

よく、頑張ったねー偉い偉い」

コイツはバカにしているのだろうか？

しかも、ぼくの頭に手を置いてなでなでしてくる。

「ウール殴られたいのか？」

ぼくがドスをきかせて話すと。

「今のマスターでは無理だよ」

と、明るく返してくる。

「それよりマスター？」

「なんだ？」

「体、魔力で暴走し始めてるけど、大丈夫かな？」

ん？今なんて言った？

「カラダ、マリヨクデボウソウシハジメテルケド、
ダイジョウブカナ？」

なぜか言葉がカタカタに聞こえる。

そう思った瞬間・・・

「ブシャアアアア」

ぼくの耳から大量の血が出てきた。

「ガアアアアアアアアアア」

ぼくは激痛で叫ぶ！

だが、ウールはニコニコ笑っている。

なぜ笑っているんだ？

まさか、コイツがやったのか？

「ほらね、マスター。」

暴走してるでしょ、今から封印魔法を掛けて上げるよ。

今、暴走している魔力は神の魔力じゃないから、

最上級の魔法なら暴走を止められそうだよ」

そう言うと、ウールは凄く幸せそうな顔した。

その間にもぼくの体中から血が溢れだしてくる。

なんでウールは見分けが付くんだ？

しかも、最上級？誰が掛けるんだ？

だんだん、意識がなくなってきた。
すると、ウールの声が聞こえた・・・

「ヒカリヨ、ソノセイナルチカラヲモツテ、
コノモノノ、イジヨウナマリヨクヲフウィンシロ！『フウィンマ
ホウ』！」

そう言つて、ウールはその美しい顔を近づけてきた。
そして、そのまま・・・

ウールとぼくの唇が重なった・・・
ぼくは、びっくりしたが
それを表せるほどの余裕も体力もない。

すると、ぼくの体は光った。
上から、ものすごい重圧がかかり
失神しそうになったが、
その圧がなくなると、今まで苦しめていた痛みがなくなった。

「このまま、襲っちゃおうかな」

スッゴイ。殴りたくなつたが、動けない。

緊張がとけたらなんだか、眠たくなってきた。
ぼくは睡魔に負け、そのまま死んだように眠っていった・・・

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
ウル視点

今、私は愛しのマスターの寝顔を見ながら  
微笑んでいるだろう。  
なんで？って。  
それはね、やっと会えたんだよ。  
私の求める最高のマスターが、  
それに、今日は封印術で彼にキスを出来た／＼  
とっても、嬉しい。  
本当は体の一部を触っていればいいのだが、丁度良いチャンスだ。

そう思いながら背中に乗っている彼の方を見て言った。

「マスター。凄い心配したんだよ。ゆっくり眠ってね」

この、言葉は彼には聞こえないだろう。

だが、ウールはとっても幸せそうな顔をしている。

そして、村人達がいるだろう広場に向かって歩いて行った・・・

## 初戦闘（後書き）

話しの中にあつた。くくくくくくくくくくが続けているのは小説の人物目線を主人公から他の人に変えるのに使います。よろしく願います。

今回は戦闘でしたがどうでしたか？自分は書いていて戦闘描写で普通より凄く難しいなあゝって思いました。本当に難しかった。途中、魔法使ってしまった・・・あれしか浮かばなかったですよ。自分は本当に未熟なのでアドバイスなどよろしく願います。では、最後まで読んで下さってありがとうございました。

## 目覚めて・・・（前書き）

皆さん、こんにちは！三日ぶりの投稿です。今週は大変です。テストが・・・

と言う事で私情はさておき、今回は目覚めです。前回は初戦闘の後オルツス<sup>正和</sup>は魔力暴走を起こし、それをウールに助けてもらい、そのまま終わってしまったので、起きたら家族と話し合いの場面かな～  
と思っただんですが・・・  
と言うわけでお楽しみください！

目覚めて・・・

ん、暗い・・・

何があつたけ？

んゝ確か、

村の皆がぼくの誕生日パーティーをしてくれて・・・

あつ！そういえば、魔物に襲われたんだ！

そして、ぼくが魔物と戦つて・・・

魔物を倒して、何が原因かわからないけど

魔力が暴走して倒れたんだ。

その後すぐウールが来・・・て？

あれ？ここから記憶ないな。

しょうがない、今でも覚えている、あの激痛はやばかった。

ずっと、考えても仕方がないか。  
起きよう。

目を開けた。

すると、いつもと変わらない風景があった。  
天井は木で出来ていて、ぼくの上には大きな木目があるのだ。  
周りを見たが特に変わった様子もない。  
下りてみるか・・・

ぼくはパジャマを着替えて、  
下に通じる階段まで行く。  
階段を降りると誰も居なかった。

「父上、母上、兄上、ウール。居ますか？」

こう、問いかけてみても何もかえってこない。  
しょうがない。外に出てみるか。  
そう思って玄関に行く。

外に出てみるとまだ、朝日が昇っていた。  
ん？朝？じゃあ、なんで誰も居ないんだ？  
そう言えば今日って何日だった？  
ぼくが疑問に頭を悩ませていると、

「おい！逃げろ！」

ワートン家の屋敷に入るんだ！

魔物が来るぞおおおお！」

「音声拡大魔法」を掛けた声が聞こえる。

え！父上

そう！これは父上の声だ！

いつもは、けして出さない叫び声を出している！

しかも、魔物が来る？

前、倒したはずだろ？

また、襲撃されたのか！

「クソッ！」

ぼくは今、父上の声が聞こえた方へ走り出す。

この方向は広場だ！

何でだ？

ぼくは疑問に思いながらも走り続ける。

そう言えば、戦闘に使った白刀まだ消してなかったな。

思い出してあの白刀をイメージして「消えろ」と命じる。

すると、前方から白い粒子が飛んできた。

あれは、ホワイトウェポン白い武器の粒子だ！

あっちに在ったのか。

確か、前は武器を造るのに時間がかかって

結構、苦戦したんだっとな。  
造っておくか。

ぼくは、前の反省を生かし、  
走りながらも武器を造る事にした。  
前よりもいい刀を造るか。  
イメージをする。

（全てを切り裂き、どんな衝撃も耐え、  
生物の血肉を喰らいて自身の力に変換し、  
汚れし一魂を浄化し自然に溶かす  
鋭き刃、強固な刃、

全てを飲み込みそれを力に変える刃、汚れし物を浄化する刀！）  
そう言葉にすると、手から白い粒子が溢れ出ている。  
だが、すぐには形にならない。

やっぱり、強い力と多くの能力を持った武器は  
創造に時間がかかるようだ。  
今のイメージした刀は前の白刀に浄化の作用を加えた。  
多分、前よりも時間がかかるだろう。



そう考えているうちに40〜60人位の人達が見えてきた。

「坊主！なんでそこにいるんだ！

しかも刀の柄なんて持って、

あぶねえから屋敷にいる！ほら、こっちに来い！」

逃げていた村人の中からおじさんがぼくの肩を掴みながら言う。

だが、じつとはしてられない！

おじさんの手を払って

「ごめん、おじさん。

だけどこれは、ぼくの意味だから

それと、家族の皆は戦ってるでしょ？」

「そりゃ〜戦ってるけど・・・お前の行くところじゃねえ！」

「じゃあ、余計に行かなくちゃならない」

そう言って走り出す！

「おい！坊主！」

「おじさんは速く屋敷の中に！」

振り返り叫ぶ。

そして、全力で駆ける！

不思議な事にあの村人達以外の人を見ていない。  
なにか遭ったのか？

考えていると突然！

「きゃあああああ！」

悲鳴が聞こえてきた。

「クソッ！」

その声は今走っているところから  
東の方向に聞こえてきた。

ぼくは止まって悲鳴のする森の中へ  
急いで駆けだす。

そこに着いた。

木々がなく岩場になっている。

岩に隠れて見ると、3〜5メートルぐらいの  
ドラゴン型の魔物がぼくと同じ位の歳のきれいな赤髪の少女に襲い  
かかっていた。

ちっ、まだ白刀が半分ほど出来上がっていない。

どうする？

そうだ！新しいのを

ぼくはそう思い、左手に力を込め一本の白いナイフを創造する。  
そして魔物の左胸目掛け投げる。

あのナイフはなんでも突き通せるってイメージした。  
ナイフは予想通りドラゴンの左胸を貫通する。  
そしてナイフは岩をも貫通し、  
その後ろに広がる森の中に消えていく。

消さないとまずいな。  
そう思ったぼくは「消えろ！」と命じる。  
すると、ナイフが飛んでいった方向から白い粒子がくる。

この場には怯えた赤髪の少女と、  
さっきの魔物の魂が残っている。  
ヤバイな。少女に取り付く！

ぼくはすぐさま、浄化の銃を造りだす。

「パーン！」

銃声を鳴らし、魂をぶち抜く

撃ちぬいたそれは白くなって消える。

あの子、大丈夫かな？

「大丈夫かい？怪我とかない？」

心配そうに聞いてみた。

「うん、だいじょうぶ・・・」

ひどく怯えてる。

まあ、さっきのに襲われたら恐いだろう。

どうしようか、広場に行かなくちゃならないけど  
置いて行くわけにもいかなし、

一人で屋敷に行かせるわけにもいかないな。  
連れて行くか？

多少危ないがこれが、一番いいな。

あっ！名前聞いてなかったな。

「ねえ、君の名前教えて？」

「なまえ？・・・エリー。あなたは？」

名前か、偽名使うか？

いいや使う必要もないな。怪しまれないし。

ちなみにこの世界では、貴族ではない家系は苗字をもたない。

「エリーか、わかった。ぼくの名前はオルツスだよ。  
ところでエリー。」

ここは危ないから移動するけど歩ける？」

「うん。オルツスね」

「そう、じゃあ行こうか」

そう言つて、エリーと歩き出す。

スピードはかなり遅くなるが安全のためだ。

「エリー、ワートン家の人達がいるのはどこ？」

「戦つて私達を逃がしてくれた人達だね。

あっちだよ」

エリーはその方向を指す。

やっぱり気づいてないか。

みて見ると、エリーはぼくの予想通り広場の方に指した。  
やっぱりか、確かあそこは村の外れの洞窟に近いんだ。  
そこから進入したのか。

まだ、魔物がいるって事は  
洞窟で湧いた魔物が食料を求めて人の多い村に来たって事か。

「ありがとう、エリー。」

向こうに着いたら君の周りに魔法掛けるから動かないで  
じっとしててね」

「どこかに行くの？」

「うん、ちょっと戦うだけさ」

そう言うとなぜか黙ってしまった。  
なぜだ？

こう話しているうちに新たな白刀は出来ていた。

この白刀は前のに比べ10センチほど刃が長くなり、  
柄も合わせると110センチぐらいある。

長くしたのは浄化するときに長い方が

リーチが伸びてやりやすいためだ。

今度は鞘も造った。

今は鞘に入っている。

10分ほど歩くと森の木々の間から光が見える。  
着くな。

ここから広場が見える。

そこには、恐ろしいほど沢山の魔物の死体があった。

ぼくはエリーの視界に死体が見えないように  
エリーの視界を体で塞ぐ。

「エリー。ここに居て、

大人しくしててね。今から魔法掛けるから」

エリーは小さく頷く。

ぼくは魔法を掛けようとするが・・・

気になる事が出てきた。

前、

「魔法を使ったから魔力が

暴走したのではないかと言っ事である・・・」

そう言えばそうなのである。

基本的に体内の魔力を操れるようになるのは6歳からだ。

だが、ぼくは5歳。  
当然、天才でもないぼくは魔力が暴走するわけだ。  
こう言う事なのか。これなら意味がわかる。

どうするか・・・

あつ！そうだ。これを使うか。  
左手を出し、指輪を創造する。

これに込めた能力は魔力の吸収と  
吸った魔力で持ち主の身体の傷の回復だ。  
便利だな白の武器。  
ホワイトウェポン

これでOKだな。

ぼくは造った白い指輪を左手の中指にはめる。  
すると、つけた瞬間から魔力を吸収し始めた。  
キツイな。

だが、これで大丈夫だ。

「じゃあ、掛けるよ」

「わかった」

知っている魔法は火の玉だけだ。  
だが、これを応用すれば魔法は作れるはずだ。



作る魔法は、あくまで守るためのものだ。  
だから、バリアー系の魔法だ。

思いついたままにぼくは詠唱する。

「火よ、燃え広がり壁となって、通る全ての物を燃やせ！『火の壁』」

そう言うと、ぼくとエリーの周りに厚い火の壁が地面から噴出してきた。

中は半径3メートルほどだ。

この火はぼくの意識が無くなるか「消えろ」と命じない限り消えない。

これなら大丈夫だな。

「エリー、ぼくは行くけどここから出ちゃ駄目だよ。

もし、この火が消えたらワースン家の敷地に全力で走るんだわかった？片付いたら戻ってくるから」

優しく話しかけると、コクコク頷いてくれた。  
よし、行くか。

そして、オルツスは再び戦いに向かう！

## 目覚めて・・・（後書き）

本当は今回の話をちよつと明るい感じでいこうと思ったのですが、そこに入るまでのイメージがわかなかったので前話に引き続き、戦闘っぽい感じになっちゃいました。すみません。

なので、次回も戦闘です！次はワールソン家VS魔物。みたいな感じで書こうかなと思っているところです。この戦いが終われば、話し合いみたいのでしょう。オルツスの白の武器正和 ホワイトウェポンの事とかですね。後、その他モロモロです。

ちなみに、今回出てきた。赤毛の少女はヒロインになるかも・・・最後まで読んで下さってありがとうございます。感想、一言もよろしく願います。

## 魔物（前書き）

皆さん、こんにちは！まず、謝罪を投稿遅くなってすみません・・・  
11月30日以来です。本当にすいませんでした。

では、今回の話しの説明をこの話は前回の予告では、「ワースン  
家VS魔物たち」みたいな感じだったのですがずれてしまいました。  
12話の準備みたいなものです。それでは、11話「魔物」お楽し  
みください！

## 魔物

ぼくは、素早く魔物<sup>ドラゴン</sup>に駆け寄り  
首を切り落とす。

「グアアアアアアアア！！！」

と赤い魔物<sup>ドラゴン</sup>が苦しそうに倒れる。

ぼくは、血が付いた白刀を振り刀身の血を払い、  
倒れた魔物から出てきた魂<sup>憎悪</sup>に白刀の側面を当て、  
浄化させて消す。

「くそつ、きりがねえゝな」

もう、30分経っただろうか。

ぼくは、エリーを置いてきた木の陰から

10メートル程しか進んでいない。

あそこから出てきた瞬間に100体程の魔物に襲われたのだ。

休まず、ぶつつけで倒しても

目の前には50体を超える魔物がいる。

父上や母上、兄上の戦闘音は聞こえるのだが  
これじゃあ、いつまでもたどり着けない。

もともと、この広場はかなり広い。  
面積は5平方キロメートルぐらいあり、  
ここから中央を目指すには2キロほどある。  
さらにこの大勢の魔物が目の前にいる。  
時間がかかり過ぎる。

とにかく、この魔物たちを倒さない限りは行けないか・・・  
手っ取り早く倒せないか？

「・・・！武器を変えるか」

そう口に出し、白刀を鞘に戻して腰に白刀を挿し込み両手を前に出す。

魔物たちは、何かが来ると感じ取ったのか、身構えている。

気にしないで、武器創造に集中する。

イメージすると手からは、白い粒子が出てきて形を成してゆく。

10秒もすると、両手には大型の銃が握られていた。魔物たちは何もない所から出てきた事に驚き、動けないでいる。

狙いはつけずにただ魔物たちの中心に銃口を向ける。そして、「パッーン！」と両手同時に引き金を引く！魔物たちは飛んだりして逃げようとする・・・

が

そのたった二つの銃弾は  
空中で2000発程に分かれ、50数体の魔物たちを一斉に襲う。

今、造った銃は散弾銃だ！  
しかも、銃弾を細かく1000以上に散弾するようにした。  
そして・・・

「『グアアアアアアアアアアアア！！！！！！！』」

2000発の弾幕は、そのまま魔物たちにぶち抜き、  
その、風穴からは白い光が見え  
魔物の体内ではじけ飛ぶ。

ほんの10何秒で先ほどまでは50体以上の魔物たちがいた  
地には何も残らずただ、無数の小さく白い銃弾が散らばっていた。

「なかなかの威力だな」

感心しながら握っている散弾銃ショットガンを見る。

この銃には浄化の作用と、  
当たった後に体内に残り続ける銃弾をイメージした。

だから、当たった銃弾は魔物の体内で中心部まで潜り込み、その浄化の力で魂を消し去ったのだ。

効果は絶大だ。

あれ程いた魔物たちを一気に消せたのだから。  
これの欠点としては、近くに仲間がいると使えない事だけだ。

あつ、関心してる場合じゃなかった。

そう思い出し、ぼくは未だに戦闘の音が聞こえる  
広場の中央を目指し走り出す・・・

しばらく走っていると、広場の中央が見えてきた。

「っ！？なんだこれは・・・」

そこは、いつもの青々しい緑が生い茂っている  
イメージはなく周りの木々は枯れ落ち、地面には無数の穴が開いて  
いる・・・



「どういうことだ・・・？」

そうか！

そういえば前、ヘルシスさんが言っていたな。

たしか・・・

結界を張らずに魔法を使うと、

空気中の魔力

マナ暴れだして自然破壊を起こすって。

きつと、行き成り魔物たちが襲撃してきたから、

結界を張る余裕が無かったんだ。

ぼくも、張らずに『火の球』使ったし・・・

ぼくは、前の前の風景に驚きつつも、

激しい戦闘音の聞こえる方へ足を運んでゆく。

「ボオオオオオオン！」「グアアアアアアア！！！」

など激しい音も聞こえてくる。

結構怖い・・・

そんな音に警戒し白刀を抜いて戦闘状態になる。

ショットガン

散弾銃は走っている時に戻した。

ゆっくりと歩いていくと、やっと母上たちが見えてきた。

「っ！」

ぼくは、驚いた！

なんと、母上たちは数えられないほどの魔物たちと戦っていたのだ！  
しかも、ぼくが今まで倒して来た

4～5メートルほどの魔物<sup>ドラゴン</sup>だけでは無く、

中には、10メートルを超す

大型の魔物<sup>ドラゴン</sup>までいるのだ！

ぼくはそこへ行こうとすると・・・

「あなたああああ！これじゃあ、きりがないわ！

私がぶっ放すからジルの近くに行つて結界を張つて！」

焦っている母上の大声が聞こえてきた！

しかも、いつもは使わないような言葉を放ちながら。

「わかったマリア！

ジル、こっちにこい！母さんの魔法をくらうぞ！」

と、父上が母上にそう答え、兄上を呼んでいる。

「わかりました。父上！」

兄上が父上に駆け寄って行き、父上の隣に着く。

「ふ〜」っと呼吸を整えた父上が、

『魔力よ、他の魔力を拒絶し、

全ての力を遮断し、壊れる事なき壁となれ！結界魔法！』

と、上級の結界魔法の詠唱をし、結界を張る。

結界は、基本的にはマナ空気中の魔力のある空間から区切る

壁を張り、中に別空間を作り魔法を使用した時の< r u b y > < r  
b >

マナ< / r b > < r p > ( < / r p > < r t > 空気中の魔法< / r  
t > < r p > ) < / r p > < / r u b y > の暴走による自然破壊を  
防ぐための魔法だ。

それと同時に、結界魔法は外部からの魔力を遮断する事も出来るの  
で、

広範囲の魔法で絶対に避けられないような攻撃には  
これを使うとうまく切り抜けられるのだ。

あ、忘れてた・・・

・・・母上の魔法のこと！

やばい、母上の魔法は・・・

ぼくはそう思ってた慌てて

その場から逃げようとする・・・

『聖火よ、その清き光の炎で、

全てを燃やし、全てを原点に戻せ！原初の火』

母上が詠唱をした。

すると、母上の体から

金色に輝く炎の輪が波のように周りに広がっていく。

その炎が魔物に当たると、一瞬で炎に包まれて焼け消えた。

どうやら、あの炎にも浄化の作用があるようだ。

倒した後に魂憎悪が出ない。

ん？何かを忘れているような・・・

炎、こっちに来るじゃねえか！

やばい！

どうする？もう少しで当たるぞ！

「あああああああああああああ！……！！……！！」

そうだ！

大量の魔力で金色の炎を相殺する！

そう考え、ぼくは左手にはめてあった  
白い指輪を外す。

それと同時に・・・

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！  
っ！がはっ！」

「ブシャアアアアアアア！！！！！」

いままで魔力の暴走を押し留めていた  
ストップ  
指輪が外れ、

激痛と共に体中の血管が破れ、  
血が噴出し、血と一緒に大量の白い魔力が溢れ出てきた。  
吐血もしてしまった。

しかも前より、暴走が酷い。

ぼくはその魔力を朦朧とする意識の中で  
自分の体の前に魔力を集め、盾にするように魔力を厚くし、  
倒れこまないように白刀を杖のようにして体を支える。

魔力の盾を作り終わると同時に、  
母上の金色の炎が盾にぶつかる。

「ボワアアアア~~~~~！」

と音をたてながらお互いの力を削ぎ落とし合う。

互いに力を消し去りながら、

威力が無くなるかのように色が段々透明になってきた。

やがて、金色の炎は消え去った・・・

ぼくの白い魔力の盾は消えて無くなっていた。

フラフラしながら、外した指輪を再び左中指にはめる。

指輪をはめると体が光り始め、いままで溜まっていた魔力で  
傷を治しはじめる。

ぼくは片膝を地面につけ、辺りを見回す。

「なんだ・・・と！」

なんと、そこには先ほどまでは数えられないほどの  
魔物たちがいたのに、今の一撃で全滅したのだ。  
なんて破壊力だ！

母上の強さに驚いていると、

「あなた、耐えれた？」

母上が問いかけると、

「いやあ、相変わらずの威力だね。

危うく消えなかったよ、ジルは気絶しちゃったし・・・  
これで、全滅させたみたいだけど」

父上が苦笑いしながら「あはは」と言う・・・

「あら、気絶してしまったの？ジルもまだまだだね。  
オルツスは耐え切ったのに・・・」

「っな！」

「っ！」

気づいているのか・・・！  
さすがは母上だな。

「あなた。オルツスは私の20メートル程、  
後ろにいるわ。でも、動けないでいるからつれて来て下さい」

「そうか・・・オルツスが来ていたのか、わかった」

そう言うと、兄上を抱えた父上がぼくの所に来た。

「大丈夫か？オルツス」

「はい。何とか」

「そうか。じゃあ、マリアの所へ行くぞ  
少し痛むと思うが、我慢してくれ」

「わかりました」

こう、やり取りをすると父上は抱えている  
兄上を左肩に乗せて、

次にぼくを抱えて、丁寧に空いている右肩に乗せる。

「痛っ！」

「ごめんなあ。我慢してくれ」

そう言つて、父上が母上の元に歩いていく。

今、ぼくは母上の前に正座している。

「オルツス？ここは危ないのにどうして来たの？」

「すいません」

「ハア、」

絶対にこれ以上の答えは返ってこないわね」

「・・・」

「そう、わかったわ。」

それが、あなたの意思なら構わないわ。

それより、もう少ししたら今、倒した魔物たちの  
ボスが来るけどそれでも残る？」

「はい！残ります」



「うん。合格！」

と、母上が満足そうな顔をして笑顔で言ってくれた。

「それより、あなた。」

デカイ魔物が来たら、上級の『結界魔法』を張ってくださいね」  
「わかったよ。それより魔力は大丈夫かい？」

あの『原初の火』は最上級の中でも下位の魔法だけど、  
一応、最上級何だから。気をつけないと、魔力切れで倒れるぞ」

やっぱり、多く魔力消費をしたのか

母上のいつもの覇気と言うか、

プレッシャーみたいのがかかってこないから

そうかな〜って思っていたけど・・・

「大丈夫よ。たしかに、結構きついけど。  
しょうがないでしょ！」

あなたと結婚したから引退したはずなんだけど・・・  
そのあなたに泣きつかれて、頼まれたら頑張るしかないでしょ！  
帰ったら覚えておいて下さいねっ！」

「ああ、しっかり覚えておくよ」

何だろう。

この父上と、母上の周りに漂っているピンク色の空気は・・・  
なんでこの二人は、こんなにもラブラブなんだ？

「オルツス。変な事を考えるな

父さんとマリアはこんな感じだぞ。

このくらいで引いてもらっては困る」

父上がドヤ顔で結構気持ちの悪い事を言ってくる。  
いつもの威厳はまるでない・・・

「アーサー、駄目よ。

そんな事言っただけでオルツスを引かせたら。  
それより、来るわよ準備はいい？」

母上がそう言っていると、

2キロメートル程前に、

20メートル位の黒と赤が混ざったような色のドラゴンが  
やって来る。

「ああ、OKさ！いくぞ、

『魔力よ、他の魔力を拒絶し、

全ての力を遮断し、壊れる事なき壁となれ！結界魔法！』」

そう、父上が詠唱をすると透明な結界が魔物と  
ぼく達の周りを囲む。

さあ、本格的な戦闘の始まりだ！

そう言えば・・・

ウルは何所だ？

## 魔物（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございました。どうでしたか  
今回は？

マリアはかなり強いです。特に攻撃魔法が、アーサーは「結界魔法」  
のような特殊な感じの魔法が得意です。しかも、二人は未だにラブ  
ラブ。もう、最強コンビですよ〜

今回、ウールはお休みです。次ぎ出るかな？ってな感じです。

今回は、魔物たちのボス。あの20メートル以上の赤黒いドラゴ  
ンとの戦闘です。

では、次回の投稿は15日から20日くらいだと思います。それ  
より早まるかもしれませんが。感想、一言お待ちしております。お  
願いします！次回もよろしくお願いします。ありがとうございます  
た。

さて、ウールはいたい何所にいるのか・・・？

## 親の強さ（前書き）

皆さん。いつも、見て下さってありがとうございます。yuyuya  
sです。

さあ、12話です。今回はアーサー、マリアが活躍？です。  
では、お楽しみください！

## 親の強さ

ウールは何所だ？

居ないんだ。ウールが・・・

おかしい。

今さっきまでは広場<sup>ひろば</sup>に居ると思っていたんだ。  
父上や母上と一緒に戦っているのかと・・・

だが、いない。

あのウールの事だから心配は要らないと思うが  
やはり、心配でしょうがない。  
すると、母上が・・・

「オルツス！戦う前にぼつとしてちゃ駄目よ」  
「ごめんなさい。母上」

ぼくは、すぐに意識を切り替える。

「うん。素直でよろしい！じゃあ、作戦会議ね。」

もう、魔物が近くによって来ているから簡単に言うわね」

「わかったよ。マリア」

「わかりました」

「まず、私が……」

母上がたてた作戦はこうだ。

まず、母上がさっき使っていた『原初の火』の詠唱破棄で先制し、その後に父上が『束縛の水縄』という『束縛魔法』を掛けて残りのぼくと母上でフルボッコにすると言う作戦だ。単純すぎる……うまくいったら奇跡だな。

ちなみに『詠唱破棄』とは、

文字通り魔法を行使するために言う詠唱を言わないで魔法を使う事だ。

これをする、相手に隙を見せる事なく連続で魔法攻撃を行える。

だが、これには欠点がある。

それは、使うと普通に詠唱を唱えるより魔法発動の魔力がかなり多くなる事と、イメージが難しくなり、魔法失敗や、威力の減少が起きる事だ。

『詠唱破棄』は、かなり難しく、超一流の魔法使いでないと何も変化無く終わるのだ。

こんな作戦会議？をしていると、  
あの、全長20メートル強の赤黒い魔物ドラゴンが500メートル先にいる。  
戦う事に興奮しているのか、大きな口からは火炎が吹き出ている。

「そろそろね。いきますよ！『原初の火』！」

母上がそう叫ぶと、さっきよりは小さいが

それでもどんなものでも焼き尽くす威力を持っている金色の炎が  
魔物ドラゴンに襲いかかる！

（よし！これで父上が『束縛魔法』を掛けて

ぼくと、母上でボコレバおしまいだ！速くやってウールを探さない  
と！）

ぼくはそう思い、次の行動にすぐに移れるように  
魔物ドラゴンに駆けて行く。

・・・だが・・・



そんなに甘くは無かった・・・

バツサ！

と、100メートルほど上空に飛翔した。

「！つつ」

母上の『原初の火』は、音速は出ているはずだ。  
魔物<sup>アイツ</sup>はそれをかわしたのだ。

さすがに、単純すぎたとは思ったが  
こつも、あっさりかわされるとは・・・

まだ、魔物との戦闘は少ないものの感覚でわかる。

（この、魔物。強い！）

ぼくが驚きで身動きがとれないでいると。

「オルツス！一旦戻れ！そこじゃ、狙われる！」

父上の声が聞こえた。

かすかに声に軽い震えがある。焦っているのだ。

ぼくは、「ハッ！」とし

その指示に従うようにいち早くそこから離れようとするが・・・

ボオオオオオオオワアアアアアアアアアア！！！！！！！！！

と前方の空から強烈な音が聞こえる。

ぼくは確かめるようにその方向の空を見ると、  
ドラゴン魔物が炎を上空から放ってきたのだ！

（ヤバイだろ。あれは！）

上空から放ってきた炎は範囲が広く  
とても、かわせるような攻撃じゃない。

「オルツス。伏せて！『すいだん水弾』！」

と、母上が詠唱破棄で水属性の魔法を撃ってくる。  
ぼくは、言う通りにその場に伏せる。  
次の瞬間！

水魔法『水弾』は魔物ドラゴンが放った炎に直撃した！

シューウウウ~~~~~

と水と火が当たりぼくの周りは水蒸気で何も見えなくなる。

（今は、魔物アイツからは見えないはず  
父上の所に行くのは今のうちだ！）

そう思い。人影が見える方へと駆ける。

「大丈夫か！？オルツス！」

近くに行くと父上が心配しながら駆け寄ってきた。

「はい、大丈夫です。父上」

「良かった。父さんは、母さんの所へ行って  
援護するけど、どうする？」

「ぼくは、ここで魔物に遠距離で攻撃します」

ぼくの発言に父上は顔をしかめる。

それもそうだ。今、ぼくは何も持っていない。  
遠距離で攻撃できるわけが無いのだ。

だが、ぼくは持つていなくても  
ホワイトウェポン  
白の武器があるのだ。

造れば所持していなくても攻撃は出来る。

「遠距離？どうやってする？何もないだろ」

「大丈夫です。父上。それよりも母上の所へ」

「・・・納得はいかないが・・・わかった。  
後で話を聞かせろよ」

「わかりました」

そう言つと父上はまだ不思議そうに顔をしかめ  
苦笑い？をしている。

そのまま「頼んだぞ」といい、行つてしまった。

どうやら父上が母上の所へ着いたようだ。

ついた途端に二人は連携技を繰り出している。

父上が来るまで母上は一人で魔物アイツと戦つていた。

若干母上が押されていたが今では逆に押している。

一応、攻撃の為に追撃機能の有る短槍ショートランスを創造したが・・・

（ぼく、戦わなくてもいいよね・・・？見てよ・・・）

戦闘を見ていてイジケタぼくは、そのまま短槍ショートランスを消す。

ぼくとしながら戦闘を見ていると

耳が張り裂けそうな程の爆音が聞こえた。

バアアアアアアアアアアアアンンン！！！！！！！！

（耳千切れる・・・）

これ比喻じゃないよ、マジで鼓膜破れるから！

激しい爆発の余波が周囲に広がる。

余波だけで残っていた木々は吹っ飛んでいった。

（父上と母上、環境のこと考えてるのかな？）

今の爆発は、父上と母上が『連携魔法』を掛けて出来た

二つの炎が爆発したものだ。

炎は、金色の炎は、母上。紅蓮の炎は、父上だ。

ちなみに連携魔法は二人以上の魔法使いが集まり、

お互いに同属性異種の魔法を掛け、

相乗効果で双方の魔法威力や効果を上げる高等な魔法だ。

しかもこれには条件があり、掛ける人が自分と魔法性質が似通っている事と、

魔法のレベルが同じ位で無いと駄目だ。

『連携魔法』に掛かった魔物は当たった瞬間に皮を焼かれて貫通し、

そのまま、金色と紅蓮の炎が体内に広がり、行き場を無くした炎の塊は  
外へ押し出されるように魔物の体中から色々な方向に爆発し、  
花火のように魔物の血肉が砕け散らせた。

あゝ、少し勿体無いような気がする。

だって、あの魔物の強さは上位に位置している感じだったし、  
元々、魔物は浄化すれば死体からは  
鉄鉱石や、牙、角、目、毛などその他もろもろの素材や肉などの食  
料も確保できる。

しかも、この世界の魔物は二つに分かれるのだ。  
1つは知性が無く、自分に植付けられている本能のみで行動する。  
これは、何も考えずに他の生物を見ただけで襲ってくる馬鹿だ。

もう一つは知性があり、本能はあるものの自ら考えて行動する。  
この種の魔物は人に懐く可能性がある、

知性を有るが故に自分よりも格上の相手だと従う。

魔物の身体を魂を浄化する時に壊さなければの話だが・・・

今の魔物はドラゴン型の上位種だ。  
だから、知性を有り合わせており、従える事が出来たのだが・・・  
魔物の体は魂憎悪と共に粉々に砕け散った。  
砕けたお蔭かげで素材も取れない・・・  
ドラゴン種の素材は価値が高いのに。」  
うーん、実に勿体無い。

しかし、本当に出る幕ねえじゃねーか・・・

しばらくブルーな気持ちでいると  
魔物を倒した二人はお互いに喜び合い、  
抱き着いてその場にピョンピョン跳ねている。  
ラブラブですな！

二人がデカイ魔物ドラゴンを倒して、  
しばらくしても二人は抱き合っている。  
場所考えようよ・・・

居る意味が無い・・・  
っーか、忘れられてない！？・・・

しかし、呆気なかったな。

二人で協力しただけで倒せないだろ。普通・・・  
これが親の強さというものか。  
最強だな。

二人のラブラブが終わると、  
どちらとも顔を赤くしてやっと、こっちに気づいたようだ。  
すると父上がバツの悪そうな顔をして、

「ごめん。忘れてた・・・帰るか」

やっぱり忘れてたのかよ・・・  
言われると悲しすぎる。

だが、悲しんでいる場合じゃないんだよそれが・・・  
森にエリーを置いてきているし、  
何よりもこの場に居ないウールが心配だ。



「すみません、父上。」

ぼくはもうちょっとここに残ります」

「なぜ残るの？危険じゃない？」

母上が首を傾げて聞いてくる。

「はい。危険なのはわかっています。

でも、約束をしたのでその約束を守りに。  
後、ウールがないので探しています」

「どうせあなたは止めても行くでしょう？オルツス？」

「はい」

「そうか。オルツス気をつけろよ。

マリア。屋敷には村のみんなもいるから速く戻るか」

「わかりました、あなた。気をつけてね。」

「はい。母上！」

こう言い残すと、母上たちは兄上を連れて屋敷へ帰っていった。

まず、エリーか。

ぼくは、素早く優先順位を決める。

最初はエリーだ。  
ぼくは、駆けて来た道に戻った。

しばらく走ると、  
ぼくの作り出した炎の壁が勢いよく燃えていた。  
炎の壁の前に立って・・・

「消えろ」

そう言うと炎は四方に飛び散った。  
すると、中から

「オルツス」

と言いながら、赤髪の少女がぼくに抱き付いてきた。

「ど、どうしたの急に／＼」

「恐かったの。周りは火で囲まれてるし・・・  
一人ぼっちだったし・・・」

一人ぼっち・・・か、悪いことしたな。

「ごめん。エリー、一人にして・・・」

「いいよ。約束、守ってくれたから」

何だろう。この子、めっちゃ可愛い／＼／  
いかん。雰囲気流されるわけには・・・

「エリー。ここは危ないから屋敷に行くよ」

「わかったよ」

急がないとな。

二人は再び走り出す。

やっと、屋敷に着いた。

エリーの親もいた。

事情を説明した。（ここに来る前に見つけた。と言う事にしたが）  
すんごい頭を下げられたけど、助けるのは当然じゃないのか？  
まあ、いいか。

それよりウールだ！

ぼくは、広場に向かってまた走り出す。

広場に着いた。

ウールは居ないな・・・何所だ？

(ます、たー、た、す、けて・・・)

！なんだ？今の声！

頭から聞こえてきたのはウールの苦しい声だ。それと同時にウールの場所がわかった。

あの、赤黒い龍が出てきた。洞窟だ。

やばい。今の声は明らかに攻撃を受けている。速くしないと、手遅れになる。

ぼくの判断は速かった。

魔力の暴走を抑えている。左手の指輪を外す。すると、

「ガアアアアアアアアアアアア! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

またもや激痛が襲う。

だが、ぼくは気にしないで魔力を背中に集める。

シューウウウウ！！！！と魔力が集まる・・・

背中に魔力が集まっていく・・・  
今、ぼくの姿を見れば誰でも驚くだろう。

体中は血でベツタリしていて真っ赤だ。  
そして何より、ぼくの背中には・・・  
天使のような純白の翼が二つ、背中に備わっているのだから。

そのまま、純白の大きな翼で空気をかき分け  
空を飛ぶ！

「ウール！！！！！！待ってろおおおおおお！！！！！！！！！！」

## 親の強さ（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。今回の話はどうでしたか？私としては、魔物弱くし過ぎちゃったなあ～って感じですよ。魔物の名前などは、主人公が子供なので出していないです。読みづらくてすいません。単に、主人公が知らないという設定だからです。旅を出るころにはちゃんと名前を出します。

後、2～5話書いたら途中設定を入れさせてもらいます。ここでちゃんと名前を出します。（魔物の）

次話は、ある人の視点から入ります。その後に、オルツスVS？??です。

ぜひ、次回も見てください。感想、一言お待ちしています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

## 思い・・・（前書き）

皆さんこんにちは！ y u u y a s です。 いやあ、今日24日はクリスマスイブです！

明日はクリスマス。 皆さん、メリークリスマス！

今年は速かった、実に時間が経つのが速かったです。

さて、挨拶はここまでにして今回の説明を・・・今回はウール話です。 書き方が難しかったです。 時間は前回から少し戻ります。 あんま変わらないですけど・・・

では、お楽しみください！

思い・・・

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
ウル視点

「ハア、ハア・・・っ！！！」

私は息を切らしながら、魔物の攻撃をかわす。
魔物の攻撃は地面を砕く。
今の状態は獣化しており、
マスターにもらった白いワンピースが
出ていないため当たれば簡単に粉碎する。

魔物は私に隙^{すき}を与えないように
さらに攻撃を繰り返してくる。
私は当たらないように必死で避ける。

今、私の目の前にいるのは

Sランクのドラゴン型の魔物、「デーモンドラゴン」です。特徴は20メートルを超える巨体に赤黒い色の体。「デーモンドラゴン」は子に当たる「デビルドラゴン」と洞窟などに群れを作って生活する。だから、洞窟の中には多くの仲間がいるはずなんだけど・・・辺りには見当たらない。なんでだろう？

昨日の夜、私はマスターの誕生日パーティーに起きた魔物の大量発生で嫌な予感がした。模索してみたら、いつもは洞窟の周りには多くの「デビルドラゴン」がいるはずなのだがこの日に限っては居なかったのだ。

私は直ちに洞窟の中に入ろうとしたがマスターが心配だったので戻ることにした。

村に戻ると先ほどまで沢山居た熊型の魔物

「バーサーカー」が数体、死体となって転がっていた。周りに人がいない事を見るにどこかへ非難したようだ。

その後に私は「鉄熊」に魔法を使っているマスターを目撃し、背後から付いて行った。

マスターは「鉄熊」に止めをさしていた。

でも、彼はまだ制御出来ていないのに魔法を行使したため、魔力の暴走を起こしていた。

私はすぐにマスターの魔力暴走を最上級の「封印魔法」を使い止めた。

マスターはそのまま意識を失い、

私はマスターを彼の部屋に運びそのまま寝かした。

本当は色々したかったけど、

私とて気を失っているマスターを襲うほど勝手ではない。だから、

「起きたら色んな事しましょうね。マスター」

と言った。

言ったら顔をしかめていたけど、そこはあえて気にしない。

マスターを部屋に運び私の心配事は無くなったから再び、あの洞窟に行きました。

村からしばらく行くと「デビルドラゴン」が、うじゃうじゃいましたが、

私は隠れていたため知能が無い「デビルドラゴン」には見つかりませんでした。

あの大群はなんだったのでしょうか？

私は疑問に思ったが気にせず洞窟へと向かって行きました。

そして、洞窟の中に入り奥へ行くと2体の「デーモンドラゴン」がいた。

私がこの場所に着くと行き成りプレスを浴びせられそれをかわしたら、1体に逃げられてしまいました。何所に行っただろう？

で、今戦っているのはもう1体の「デモンドラゴン」です。
私はマスターの封印魔法で大分魔力を消費してしまって
体が思うように動きません。
かなりピンチです。

と言う感じで現在の状況に至ります。
ずっと攻撃を避けているせいで体力も残りわずかで
昨日の夜のマスターに掛けた魔法で
使った魔力も回復していないため使えろとしたら上級1回。
人型に体を変えるのにも多大な魔力を使うため
人型にはなれない。
本当にヤバイです。

そんなことを思っていると「デモンドラゴン」は火を噴いてきま
した。

私は横に飛んで避けます。
火が当たった場所に目をやると、岩が溶けていました・・・
当たっていたら・・・狼の丸焼きが出来ていましたね。

すぐに「デーモンドラゴン」に視線を戻すと
火を出した反動が何かで首がから空きになっていました。
私はこのチャンスを逃すまいと
疲れ切った足にムチをうち、
走り出します。

今の私には攻撃手段は噛みつくか、
爪で切り裂くか、魔法を使うか・・・
一つ目と二つ目は効果が無い。
ドラゴン系の魔物のは物理系はあまり効果が無いため、
よっぽど・・・マスターのあの白い刀があれば大丈夫ですけど。

と言う事で、残りの手段は魔法攻撃しか残されていない。
もう、魔物は体勢を持ち直しつつある。
時間にしてあと・・・5秒！
瞬時にやるしかない。
無詠唱で！

私は獣化した状態で魔法を無詠唱し、
口の1メートル前に氷のドリルを作り出し
「デーモンドラゴン」に放つ！

私の放つ魔法は

そのまま「デーモンドラゴン」の首に進んでいく……

だが。

「デーモンドラゴン」は行き成り首を回し、

氷のドリルに向かって火を噴いた！

氷のドリルは火に溶かされ、

火はそのまま私に向かって進んできた。

(っ!やばい。かわせない)

そして
・
・
・

「クウウウウウ~~~~」

火は私を焼く。

[illegible]

あああああつあつあッあああッあつあああああああ
あ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

シュッと体の火が小さくなっていく・・・
体中は火傷を負い、
ところどころその美しい銀色の毛は焼け焦げている。

「デモンドラゴン」はウールのその姿を見て
さらに攻撃を加えようと何かを放とうとしていた・・・
ウールは今のダメージや疲労のせいでピクリとも動けないでいた。
しかも、意識も朦朧としている。
でも、それでも、その朦朧と意識の中で必死に生きようと助けを求めていた・・・

一緒に過した時間は短いが、
彼女が好意よせている
あの・・・少年に・・・

（ます、たー、た、す、けて・・・）

この助けはマスターに伝わったのだろうか？

私は心の中で助けを求めているながらも、

マスターにはここに来て欲しくないと思っている・・・

私はやっと見つけた。

大切な人を。

なのに、なんで、こんな速く、離れないといけないの・・・？

「デーモンドラゴン」はまだ、攻撃の準備をしている。

きっと、最大威力で技を放ち、私を跡形も無く消すのだろう・・・

私は朦朧とした意識の中であきらめていた・・・

今、この状況を打破しても

この状態では私は助からない・・・

あの人と一緒に道は歩けない・・・

ごめんなさい。

とウルは謝る。

マスターにとって私はそこまで大事な存在ではないと思うけど、彼はきつと・・・悲しむ。優しい人だから・・・

（本当にごめんね。マスター）

意識は段々と薄く・・・

「ウール……!! 待ってろおおおおお!!……!!……!!……!!」

（あれ？この声。マスターの、声かな？）

そして・・・ウールは意識を手放した・・・

思い・・・（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！どうでしたか？
私は書くのに大分悩みました。本当に・・・感想、一言お待ちして
おります。感情の書き方など指摘があればどんどんお願いします。
次の投稿は明日から29日までを目指して頑張ろうと思います。
内容はいよいよウル救出です。オルツス、ガンバ！
では、ありがとうございました。次回もよろしく願います。

救出（前書き）

皆さんメリークリスマス！あれ？時間こえてました。26だ・・・あと5日で31日、大晦日です。年内であと2回投稿したいとは思っています。頑張ろう。

と、言う事で今回の内容はズバリ救出です。ウールを助けに来たぜ！頑張るんだオルツス！

では、続きは読んでからのお楽しみです！どうぞ！

救出

「いてえゝ。このやろゝ」

ぼくは悪態をつきながら、音速を軽く超えて飛行している。背中からは血が混ざった薄い赤色の天使のような翼が生え、力強く羽ばたいている。

音速を超えると普通は、衝撃波で体を傷つけてしまうが、ぼくの前に魔力で膜を張っているため、自損していない。

だが、魔力の暴走のせいで体中の血管が軽く切れ、血だらけになっている。そして今もなお噴出している。軽く貧血状態です。はい。

この状況が続いたら、さすがに死ぬな。もって10分だ。
場所は・・・あと1キロ先だ！

ウールからのメッセージ？を思い出し、
その場所へ向う。

しかし、ウールは大丈夫だろうか？

ウールの声を聞き広場から出たのが10秒前だ。
時間的には間に合うはず・・・

（間に合ってくれよ・・・）

「あつた！」

ぼくは確認するために空中に静止する。
ウールからのイメージ・・・か？
それ通りの洞窟がそびえたっていた。

「でかいな・・・何がいるんだ？」

その入り口は20メートルほどか？
さすがにデカすぎる・・・

何がいるんだよ？

（油断できない状況だな・・・）

ぼくは自分に、そう言い聞かせて全身に力を入れる。

速度はさっきより落とさないといけないだろう。

危ないし、何が出るかもわかんないしな。

そうして、洞窟に入っていく……

ドラゴン
洞窟の中には魔物が沢山いた。

さっきよりも多い100何体だ・・・

まるで奥に何かを隠しているようにも見える。

「悪いが、こんなところで時間くつっている場合じゃねーんだよ！」

さっさと行かせてもらおう！」

「グアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

と叫び、魔物たちが襲ってきた。

ぼくは素早く両手を前に出し、

二丁の散弾銃創造する。

そして両手同時に引き金を引く！

「パッパァーン!!!」と銃声が響き

ぼくは洞窟の開けた場所を見つけた。
あの場所にいるのか？急ぐか。

「ん？何で赤く光っている？

何かがあるのか・・・？ヤバイ気がする！」

嫌な予感がしたぼくは魔力の翼の出力を上げ、
スピードを上昇させる。

そして、そのままのスピードで開けた場所を突っ切る！
が、前方から行き成り真っ赤な火炎が襲ってきた！

「何で行き成りこれなんだよおおおおお！！！！！！！！！！」

ぼくは腰から白刀を抜き背中の魔力を刀に集中させ、
魔力のこもった白刀で力一杯火炎を切り裂く！！！！

「えっ！？」

ぼくは驚いた。

「ゴオオオオオオ！！！」と刀から衝撃波が出て、
そのまま火炎を消し飛ばしたのだから！

消し飛ばした火炎の先には

さつき父上や母上が倒した赤黒くてデカイドラゴンがいた。
デカイドラゴンは驚いたように目を見開く。

「アイツかよ・・・何で二体いる？二体・・・
それより、ウールは何所だ？」

ぼくは驚いたデカイドラゴンを無視してウールを探す。

「いた！」

見つけた。獣の状態だ。ぼくはその場所へ駆け寄る。
近くによりとなくとも痛々しい姿で転がっていた・・・死んだよう
に・・・

「ウール！！！！くそっ！」

大丈夫か！起きろ！ウール！！！！ウールウウウウウウ！！！！」

ぼくは混乱していた・・・

体はガクガクと震え、目は涙目になっていて霞かすんで見える。

「あ、あれがあるじゃないか！

これを付けねばひとまずは・・・大丈夫なはず・・・」

思い付いたぼくはポケットに入っている指輪を取り出し、
その震えた手でわずかに開いているウールの獣の手にはめる。

はめるとウールの体は光り輝いた。
どうやら治療中のようだ・・・
段々、はげていた銀色の毛が生えてきて、
火傷の痣も無くなっていく・・・
指輪造これつておいて良かった・・・
ナイス過去のぼく！

って、ふざけている場合じゃなかったな・・・
目の前のデカイドラゴンクソトカゲを殺やらないといけない・・・

クソトカゲ デカイドラゴンの死刑を決めていたら、アイツが火を噴いてきた。
ぼくは再び魔力を背中に集め、翼を生やし、ウールとぼくを囲むよ
うに盾にする。
「ボオオオオオオオ！！！！」と翼に火が当たるが
ビクともしない・・・
クソトカゲ デカイドラゴンの驚いた顔が非常にムカついたので・・・言っ
てや
った。

「おい、トカゲヤロー。
てめえの火なんかぬるいんだよ、
出なおしてこい、クソトカゲ・・・」

と、言うとはくの予想通りデカイドラゴン^{クソトカゲ}は挑発にのり、
口から連続して火を吹いてきた。

（やはり、知能はあるな。人の言葉がわかるみたいだし・・・
それより、ウールがこのままだと危ないな。
そう言えばぼくって火以外の魔力使えたっけ？
試してみるか・・・クソトカゲは火を使っているから有効なのは
水属性かな？）

ぼくは翼を盾にしたままウールの方を向いて魔法を詠唱し始める。

「水よ、溢れ出てドーム状となり、
全てを飲み込む壁となれ！『水の半球』」

と、詠唱するとウールの周りには水のドーム化でき、
ウールを守っている。

「これ、薄くないか？
本当に大丈夫かよ、こんなんで・・・」

自分で魔法を掛けていながら良く言うと思う・・・

心配になったので試しに小さな針を創造して、

水のドームに投げつけてみる。

すると、針は水のドームに触れると当たった先端から溶け始めた・・・

・

「こえーよ！なんで溶けるんだよ！！！」

近寄れねえーじゃねえかよ！」

この魔法の恐ろしさを確認すると、

今まで響いていた爆発音が鳴り止んだ。

どうやらデカイドラゴン^{クソトカゲ}の火の連射が止まったようだ。

まあ、どうでもいいが・・・

「さあー、狩の時間だあああああああ！」

殺り合おうじゃねえーか！！！！トカゲヤロー！！！！」

と言い、翼を広げデカイドラゴン^{クソトカゲ}に突っ込んで行く！

デカイドラゴンは気づき、また火の玉を連射してくる！

「かわす必要も無いな！」

ぼくは静止して、翼を広げ「バッサ！」と羽ばたく。

そうすると翼からは10～20センチの無数の羽根出てきて、火に向ってそれぞれ発射される！

その羽根は火に当たり、火と共に消える。
翼、いや羽根といつても元はばくの魔力だ。
この魔力で母上の最上級魔法。『原初の火』だって相殺したんだ。
この火ぐらい簡単に打ち消せる。

「次はこっちの番だ。クソトカゲ！」

もう5分はしたな・・・
そろそろ貧血兼出欠多量で死ぬ。
だって、血が噴水のように湧き出てるぞ・・・
すぐにけりが付くと思っていたから、こんなにねばられるとさすがにヤバイ。

そう、ねばられているのだ。
こっちは翼の羽根で攻撃するとデカイドラゴンは
火の玉を連射して相殺してくるし、近寄って白刃で切りつけようとする
と
プレスを放って来やがる・・・

さっきのは魔力を白刀に溜めて、それで衝撃波を撃ったけど
今は高速戦闘をしている状態で全ての魔力を刀に集中できない。
だいたい、この翼がなかったらとつくに逝っている。ぼくが！

さっきの時間も合わせるともうすぐで8分か・・・
段々、意識も薄くなってきたしマジで死ぬかも・・・

「あああああ！！！！！埒がねえ！一か八かだ！」

どうせ時間ばっかかけても、こっちが死ぬだけだ。
ここは一か八かだ。しょうがない！

ぼくは準備する時間を作るために
魔力の翼を今までで一番強く羽ばたく！
羽ばたくとそこには無数の羽根があり、真っ直ぐに切り裂くように
進んでいく！

やはり、「ボワアアアアアアア！！！！！」と
クントカゲ
デカイドラゴンが火の玉を連射してきて羽根の攻撃を無力化される。

だが、それでいい。

その火の玉を連射した一瞬の隙で準備は出来た。
ぼくが握る白刀には魔力が集中しており、その魔力は渦を巻いてい
る。

きつと切れないものは無い！

ぼくはデカイドラゴンと決着をつけるために、
クントカゲ
残りの魔力を全て足の裏に込めて、一気に放出する！
今のはぼくの脚力＋魔力の反動を利用した加速技だ！

この技で一瞬で魔物の懐に入り込み、
そこを白刀で斬りつける！

「ボツオオオオオオオオオオオオンンンンンン」

!!!!!!!!!!!!!!」

と、デカイドラゴンは白刀の衝撃波を浴び、
当たった所からドラゴンの鱗や皮膚、肉、骨が砕け散って、もうグシャグシャだ・・・

デカイドラゴンはボロボロになっていて、元の姿からは想像が出来ない事になっている。ぼくは肩で息をしながら死体それを見下げる。目は完璧に動向が開いており絶命している。

(これをやったのは自分だと思つとゾツとするな)

「うっ」

くらつと立ちくらみがする・・・

まずい貧血。死ぬ・・・

急いで魔力の制御を外す。

外しても、魔力と血は漏れている・・・まず、魔力を閉めないとな。

「たしか・・・体の中心に魔力を集めてからだな。

『一時封印魔術』」

かけると魔力の漏れは収まった。相変わらず血は変わらないが・・・

止血しないといけない・・・

回復機能がある武器、造れるかな？

意識が朦朧としていながらも、頭を働かせてブレスレットを創造する。

このブレスレットには常時回復と障壁を効果に入れた。

そして、そのブレスレットを右腕にはめる。

付けるとウールと同じように体中が光り始める。

傷が徐々に無くなってきた・・・これで痛みは無い。

あとは血だ。血が足りん・・・これは無理だ。我慢しろばく！

つか、ウールは大丈夫かよ？

ぼくは水のドームの所へ駆け寄っていく。

そこへたどり着くと、ぼくは「消えろ」と命じる。

すると、水のドームは消えた。

中を見るとウールは獣のままで気持ちよさそうに眠っていた。
どうやら、危険はさったようだな。

それよりここから出ないといけないな。

速く出るか。さっきの衝撃波で洞窟^{クントカゲ}自体の耐久が落ちているしな。

ん？素材取らないのって？あの、デカイドラゴン^{デカイドラゴン}は

ぼくの衝撃波のせいで粉々になっているから、

持っていたとしても価値がない・・・それならいらないだろう？

「まあ、さっさと出るか」

ぼくはウールをおんぶしながら、洞窟の外へ向って歩き出す。

「これで、一先ず救出完了だな」

そう、呟いて・・・

救出（後書き）

どうでしたか？今回は？もう、救出じゃなくて戦闘になっている気もしましたがオルツス頑張りました！もう少して死ぬところだったのに・・・

感想・一言などがあればよろしくお願いします！では、今回はこの辺で最後まで読んで下さってありがとうございました。

次はいよいよ話し合いかな？

封印と聖獣と帰宅と（前書き）

皆さん、あけましておめでとうございます！すいません、前回の投稿の時に前年までに2話投稿って言っていたんですが遅れてしまいました・・・すいません。

では、今回の説明を・・・今回は戦闘が終わって帰路に着いたところですよ。内容としてはオルツスに新たな仲間が！！！！って感じですよ。久しぶりにヘルシスさんも登場します！

続きは見てみてください。どうぞ！！！！

封印と聖獣と帰宅と

「あゝ、おめえゝよ。すつげえゝ重い・・・」

ぼくは不満を漏らしながら山道を歩いている。

背中にはスヤスヤ寝ている獣状態のウール、

ホワイトウエポン

しかも、腰には両手で持つのも結構キツイ白い武器（白刀）が挿し
ている。

ただでさえ魔力の暴走の影響で体がボロボロだし、貧血でクラクラ
する・・・

頭痛いし・・・

つか、ウールコイルいったい何キロあるんだ？

めちやくちや重い・・・

（なんの罰ゲームだよ！こっちなんで戦闘後で貧血で、体ぼろぼろ
だぞ・・・）

そつ愚痴を漏らしながらぼくは、だらだらと歩いていく・・・

「木陰発見！ぼくは今から休む！！！」

あの場合から歩いて約1時間、まだ村の広場ですら着いていない・

・
子供の身体能力で狼と刀を担いで走るなんて不可能だからな。
さっきまで音速で飛んでた自分が恐ろしいぜ・・・

と言う事で疲れた！！！休みます。

ウールを最初に近くの木陰に寝させてからばくもそこへ腰を下ろす。

「しつつかし、まあゝ疲れた・・・」

ぼくは空を見上げながら爺さんくさい事を言う。
いや、マジで疲れるから・・・

戦闘しまくった・・・体力もたねよ。

最後のデカイドラゴンなんて奇跡クソトカゲだろ。

うまく懐に入っていなかったら、今頃逝ってたよ・・・いや、マジで。

まあゝ、いいや。

ん？なんだか、眠く・・・

そして、ぼくの意識は薄れていった・・・

「うん、ここね。今回はゆっくり寝させて欲しかった」

今いるのは真っ白な世界・・・まあ、ぼくの夢の中だけだ。
まあ、この世界？じゃないな、夢の中にいるって事はあの人があるって事だよな。

「正和」

ほら、来たぞ・・・その名で呼ぶ人は今はあの人しかいない。
そういえば何年ぶりだ？・・・5年か。

「へ、ヘルシスさん。お、お久しぶりです」

とりあえずあいさつをと。

「何ですか？その『何で来たんだよコイツ』みたいな動揺は・・・」
「ソナコトナイデスヨ」

「カタコトで喋ったところでバレバレです」

「（あれ？ヘルシスさんってこんなに意地悪だったけ？）」

「正和、聞こえますよ。心の声・・・」

「すいませんでした！」

ぼくは勢いよく飛び上がって、そのまま空中で土下座の姿勢をと
り、

ヘルシスさんの足元に着地する・・・

へ、ヘルシスさんが恐い・・・

「だから聞こえてますよ。心の声・・・」

「もう許してください！ぼくが悪かったです！」

「つぶ！冗談ですよ、冗談」

「えっ？」

じよ、冗談、だと・・・

ぼくのこの恐怖はなんだっただんだ！！！！

「すみません。だって正和こんなに小さくなっていて
しかも一人称が『ぼく』になってたんですよ。かわいくて、かわ
いくて・・・つぶ！」

「ヘルシスさん・・・からかわないでください。

好きでこうなったんじゃないやありません。強制的にですよ！強制的！

！！」

「ごめんなさい・・・本当に、つぶ！」

「もう、やめてええええええ！！！！」

ぼくは半泣きになりながら叫んだ！

なんで、なんで、ヘルシスさんがこんなにも意地悪になったんだ！
！！！！

わああああああ！！！！！！

「あ！こんな事してる場合じゃなかった」

「（ヘルシスさん・・・最初に言ってきたのはあなたですよ・・・）」

「正和。だから聞こえてますよ。それよりも早くしないといけません」

「えっ？何をするんですか？」

急にまじめな顔をしてきたヘルシスさんに驚いたが、
この替わりようはよっぽど重要な事なのかも。

何話すのかなって考えていたらヘルシスさんが口を開いた。

「正和、話は長くなりそうなのでまずは封印から」

「封印？何ですか、それ？」

「封印は『封印術』ですよ。正和は自覚ないかもしれませんが
あなたがドラゴンと戦闘したじゃないですか」

ドラゴンってあのデカイドラゴンか・・・？
クントカゲ

でも、なんで『封印術』を掛ける必要があるんだ？

ぼくはとりあえず答えてみる。

「うん、そうだけど」

「そのときの戦闘で神の力・・・『神力』
しんりき

使ったんですよ・・・それで後1分もすれば神認者の力が暴走し
しんにんし
てしまうんですよ」

「マジですか！」

神の力・・・『神力』ですか・・・

だから、夢の中に来たのか前言つてたもんな

あれ？あれってぼくが『一時封印術』使ったらだったよな・・・？

・・・使いましたね、はい、使いました。

じゃあ、あれで正解だったのか。結果オーライ！

まだ使えないんじゃないかったのか？

つか、いつ使った、いつ？

「使ったのはですね。え〜っと、最後のドラゴンの懐に入ってたころですね

そのときに体が音速に近い速さで動きました。

まあ、細かい説明は後です。速くしないと暴走が始まります」

「わかりました。じゃあ、お願い」

「はい」

と言うと彼女は・・・ヘルシスさんはふう〜と息を大きく吸い、

『封印術！』と叫んだ！

それと同時にぼくから行き成り力が消えて、地面に膝から付く・・・

「（マジで力入んない・・・）

「大丈夫ですか？これでOKです。しばらくすれば元に戻りますよ」

ぼくは声までもが出なくなってしまうため、

震える右腕に力を込めてグッジョブ！と手で形を作った。

OKです。と

しばらく経ってぼくの力の抜けた状態は無くなった。

ヘルシスさんに話を聞くと体の支えとなる魔力を封印されて、

ほぼゼロの状態になったため力が抜けたそうだ。

普通の人も魔力が底をつきそうになると、このように力が抜けて動けなくなるそうだ。

後は・・・あ！

確か、魔物の量が増えてきたから気をつけて欲しいってこと。

「ふう、封印ありがとうございました」

ぼくは頭を深く下げて礼をする。

「いえいえ、気にしないでください」

ヘルシスさんは笑顔で返してくれた。

ぼくは貴女の笑顔で癒されます！！！！

でも、もう行かないとな・・・

「では、ヘルシスさん。ぼくはこれで」

「はい。あっ！忘れてました！！！」

「どうしたんですか？」

「正和に渡すものがあつたんですよ」

「渡すものですか？何ですか？」

するとヘルシスさんは「ちょっと待っててください」と、言つて消えてしまった。

「すいません。この状況でぼくにどうすれと・・・
だつて、置いて行っちゃたよ・・・」

・・・待たされる事10分・・・
ぼくは胡座をかきながらあぐら白い武器でホワイトウェポン
ナイフを二振り創造して、お互いの刃をこすり合わせようとしていた。

このナイフには全てを削るってイメージで創造した。

「（よし、こするか・・・）」

二つのナイフをこすると、キィィインンと音が響いたと思うと、ふう〜と音がなり跡形もなく消えてしまった・・・

こうなるのか、前から疑問に思っていたんだ。

同じ性質の白い武器ホワイトゥエボンを打ち合わせてみると・・・するところになった。

どうやら同じ性質を持つ白い武器ホワイトゥエボンはお互いがお互いを削りあい、何も無い状態に戻す。ということだ。

「（これを知らないとイニユートでの最強の武器と白い武器ホワイトゥエボンをやり合わせたら、

イニユートの最強武器を消してしまうからな）」

と白い武器ホワイトゥエボンの性質を確かめていると

行き成り何も無い空から何かを胸に抱いた金髪の美少女が現れた。

「遅かったですね？」

「すいません。この子を取りに行つてまして・・・」

するとヘルシスさんは今まで胸に抱いていたものを手に乗せぼくの前に差し出した。

「青い鳥？」

そつ、そこには小さな青い鳥が可愛らしく寝ていた。

「はい。青い鳥ですけど、まだ小さいですがこの子、聖獣ですよ」
「聖獣！ー！」

ぼくは驚いた。

聖獣とはそのまま『聖なる獣』と言う意味だ。

聖獣は自分達以外の種族をかなり嫌い、
誰も来れない秘境や森、深海、谷、山などに群れを作り暮らしている。

しかも、聖獣は一体一体が最強と言われ一体だけで都市に一つや二つは破壊できるとされていて、
恐れられつつも神と同じように崇拜されている。

一部では「聖獣こそが神だ！」と言っている人もいるぐらいだ。
だから、こんなぼくの夢世界みたいな場所にいるはずが無いのだ。

ぼくは驚きながら口を動かす。

「ヘルシスさん。どうしたんですか、その聖獣？」
「この子は私の眷属、青い不死鳥です。名前じゃないですよ、種類ですよ。」

空気の魔力
今までの正和の戦闘を見ていたら、このままだとマナの
せいで環境が破壊してしまうと思ってこの子を持ってきたんです
よ」

「わかったんですけど、その子と何の関係があるんですか？」

「実はこの種類の聖獣・・・青い不死鳥はイニユートの聖獣では無いんですよ」

「えっ！？それって、まずくないですか？」

ヤバイだろ、それ・・・

「はい、結構ヤバイです。でも、一応その世界も私が担当で正和ならきつと使いこなせると思ったので連れてきました」

「はあ、で、何の関係が？」

「イニユートは空気中の魔力マナが

多くて魔法を使用しただけで暴走を起こしてしまいますよね？」

「はい」

「それで、この子が居ればその周囲の空気中の魔力マナを吸うので

周りのマナが薄くなり、

魔力を結界無しで使用しても環境が壊れ無いんですよ。だからです。」

だからってやり過ぎでは・・・

「大丈夫です。正和なら！！！！」

ヘルシスさん・・・その信頼が恐ろしいです。

ぼくはしばらく悩んでいたが仕方が無いので了承した。
あの子・・・青い不死鳥と言っておこうか・・・

青い不死鳥様はぼくの意識が戻った夜に空から飛んで来るようだ。
その後に契約かなんかをするみたいだ。
ああゝめんどくさい！

「じゃあ、ヘルシスさん。ぼくはこれで・・・」

「はい。まあゝまたすぐに多分呼びますから」

「わかりました。では・・・お願いします」

ヘルシスさんはニツコリと笑うと

「『空間移動魔術くうかんいどうまじゅつ！・・・！』」

と彼女は言つとぼくの意識は暗く沈んで言った・・・

「（・・・ん？揺れている？しかも、いい匂い・・・）」

ぼくは女の子特有の甘い香りと揺れている事を疑問に思い、

確認しようと目を開けると、白い後ろ姿がそこにあった・・・

「ん？ウールか？」

「あ、マスター起きたんですか？もう少しで家に着きますよ」

「ウール？」

「はい」

「体、大丈夫？」

「・・・はい！マスターのおかげです」

と、ウールは言うつと背中に乗せているぼくを前に抱きかえ嬉しそうに微笑んでいた・・・

だから、ぼくは言った。

「ありがとう」

と・・・本当に、ありがとう。

オルツスはウールに抱きかかえられながら、家に帰宅するのだった。

封印と聖獣と帰宅と（後書き）

どうでしたか？今回の話は？ヘルシスさんは大分無茶させました・
・違う世界から連れてくるとは・・書いていて自分でもやり過ぎた間があります。まっ、これで環境破壊の問題は無くなります。この設定やり辛かったです・・なんでこんな設定にしたんだろうか？

では、今回はこの辺で次回は話し合いかな？

感想・一言お待ちしています。お願いします。最後まで読んで下さってありがとうございます。

家族会議（前書き）

皆さんこんにちは！行き成りですが、活動報告でも書いた通りお気に入り100突破しました。これも皆さんのおかげですありがとうございます。

さあ、今回は話し合いですね。さてワースン家はオルツスを受け入れてくれるのか？では、どうぞ！

家族会議

「ねえ、ウール・・・」

ぼくはベットのの上に上りながら窓を開けて例の聖獣を待ちながら、疲れ切った、だらうとした声でウールを呼ぶ。

「何ですかマスター？」

するとウールがぼくの後ろにやって来てむぎゅゅと頭を抱きかかえ、静かに言う。

「いやあ、今日いろんな事が起きすぎてマジで疲れたんだよ・・・」

「

「それはドンマイです。私としては色々痛い思いをしましたけどマスターが助けてくれたので凄く幸せです」

「・・・そうか」

何でコイツ「ドンマイ」って知ってるんだよ、絶対こっちの言葉じゃねえよ。

しかも幸せの理由が助けられたってだけだよ・・・／／／

「（今、ぼく顔赤いな・・・）」

「マスター、顔、赤いですよ」

「気にするな・・・」

ぼくは恥ずかしさを隠すためにそう言いながら体を窓へ乗り出す。そう色々な事・・・

話は4時間前にさかのぼる・・・

あの、夢から目覚めたぼくは家までずっとウールに抱きかかえられていた。

あの場所から1時間ぐらいでついたのかな

その間ウールとなんで勝手に魔物所へ行ったか質問していた。

ウールはとてつもなく幸せそうな顔を一瞬固まらせたが、素直に話してくれた。

どうやらパーティーの時から気配に気づいていて、

魔物が発生した時にその異常さを感じ取り、ぼくが熊の魔物達と戦っている間に洞窟を発見し、

ぼくが倒れた後、ぼくを部屋に運びその洞窟に一人で行ったようだ。どうして一人で行ったのかはぼくのことを気遣ってくれたからだそうだ。

で、家に着いたら屋敷の前には父上と母上、兄上が今にも泣きそうな顔で待っていた。

母上はかなり心配していたのかぼくを見ると駆け寄ってきてウール

から引き剥がし、抱きしめていた。この時にウールが母上を睨んでいた事は内緒だ。

それで、母上に「どこに行ってたの？」と顔では笑いながら目は笑っていない
とてつもなく恐ろしい表情を見てぼくは固まってしまった。
父上がそれを呆れながら、

「マリア、オルツスもウールも疲れて居るようだから一旦家の中に入ろう」

「わかったわ」

母上はそう言うとはくを抱きかかえながら家の中に入っていく。
その後父上、兄上、ウールと続いて入る。

そして、ぼくは昨日の戦闘の事、魔法の事、暴走の事、ウールを助けた事、
そこには母上たちが倒したドラゴンがいてそれをぼくが倒した事だ。

普通なら親が力を恐れて自分を捨てるだろうと思ひ話さないだろ

う。

だが、まだぼくは幼いと言っても精神年齢は19歳そのくらいは大丈夫だし、

・ ぼくにはすでに心強い仲間もいる・・・今夜ももう一体増えるし・

しかも、ぼくはこの村に続ける事はどの道ふさわしい事じゃない。

魔物の大量発生にしろ、今回のウールの事にせよ、何か嫌な予感がする・・・ウールの事は彼女自身の意思で動いたが、ぼくに責任が無かったという事はない。

一つの事に気がとられすぎて、あの時最も身近だったウールの事を察する事が出来なかったのだ。

今回は、運よくお互いが生き残ったがあんなうまい話はもう2度目はない・・・

今のままでも雑魚の魔物は対処できるし、

ウールの魔力が前回の状態ならかなり強い奴にも勝てるだろう。

何より聖獣が見方になってくれるこれ以上頼もしい事はないだろう。

だから、ぼくは家族と別れるリスクを犯してこのは無しをした。

まあ、もちろん神認者しんごんしゃなどの神に関する事は言わないが・・・
重々しい雰囲気の中ぼくの目の前に座る父上ちやうじやうが口を開いた。

「そうか・・・」

「（なんだろう？ここから出て行けかな？）」

ぼくは悲劇的な結末を想像しながら意をけして聞く。

「・・・たいした才能じゃないか！

5歳児であるSランクの『デーモンドラゴン』を倒すだって、
神は我々に素晴らしき子を恵んでくださった！」

父上は愉快そうに笑いながら神に感謝していた。

「はい 本当にありがたいですね。

でも、『デーモンドラゴン』程度にてこずる様だったらまだまだ
ね」

父上の右側に座る母上はさっきまでの真剣な表情とは裏腹にニッコ
リと笑っていて、

「まだまだね」と驚くどころか「まだ駄目よ」とばかりに見つめて
くる。

「僕はオルツスがどんな力を持っても関係ないよ」

僕の左側に座るジルはそんな力関係ないと若干にやけて言うてくる。

皆は、僕の家族は受け入れてくれたのだ。

ぼくは自然と頬に温かいものが伝わるのを感じる・・・泣いているのだ・・・嬉し泣きだけどノノ

ぼくは右隣にいたウールに抱きつく、ウールは一瞬と惑っていたがすぐにぼくの頭を抱えてぼくが落ち着くまでそうしてくれた。

ぼくが落ち着くと父上が聞いてきた。

「なあ、オルツス？」

「何ですか父上？」

「ウールって結局お前のどの立場なんだ？」

「立場ですか？」

立場？なんだそれ？

「えつとな、ウールから父さんの使い魔がウールの母親だったのは知っているよな」

「あ、はい」

ヤバイ。母上がビクビク震えている。

あれは何かに恐ろしくて震えているんじゃない！

怒りを我慢している感じた。

おい！父上！何やったんだよ。彼方は何をやらかした！！！！

「まあ、父さんの場合は使い魔って事になる。でも、ウールはお前の何なんだ？」

むうゝそれはぼくも知らないんだが・・・
ウールなら知っているよな、とぼくはウールの方を見る。
するとウールが、

「まだ、何もしてませんよ」

「えっ!？」

驚いたのはぼくだった。

「だって、ウールの意識がこっちに飛んできたけど・・・」

「あっ!それだったんですか。」

だから私にも・・・気のせいだと思っていました」

「ん?なんだ意識が飛んできたって?」

おっと、ウールと1対1で話してしまった。

ぼくは慌てて皆にそのことを伝えた。

「つまり、オルツスはウールからの意識が飛んできて

それで、場所やウールの気持ちを持てきたと・・・」

「はい」

母上が聞いてきたのでそう答えると、

「それは一種の念話ねんわよ」

「念話ねんわ?」

念話^{ねんわ}って地球のテレビで見た超能力特集でやっていた
テレパシー。これみたいなものかな？
ぼくは10年くらい前の事を思い出しながら聞き返す。

「ええ、でも、この魔法ってお互いの相性と仲がマックスに近い状態じゃないと

自然に発生しないんだけどな・・・」

と、珍しく母上が困った顔をしていた。

「良かったです！マスターと私の相性はバッチリ！！！！
もう、婚約するしかないですね！！！！」

コイツはいつもハイテンションだな・・・
しかも、それだけで結婚って・・・進展しすぎ。

「まあ、ウール冗談はやめて実際の所何も無いとは？」
「突っ込んでくれない！？
むう、そのままの意味。

あるとしたら私が獣化した時に契約者と話せるってだけ」
「前聞いたのと大分違う気もするが、もういいや・・・」

そう言っってこの話を終わらせる。

「で、最後だ。魔力暴走の後どうやって止めた？」

おお、残っていた説明するので一番難しいばかりの魔力暴走の事・・・これは少し嘘を混ぜよう・・・この情報はまだ知られた句は無い。そう言う事でさっき母上から聞いた念話ねんわでウールに話しかける。

「へなあ、ウール？」

「へなんですか？」

「へ実はなあ、魔力暴走で使った魔法や道具について話さない方がいいと思うんだ・・・」

「へどうしてですか？」

「へあの道具と魔法は神に関係するからだ。だから、ウールが止めてくれたってことで」

「へわかりました」

少し間を開けてぼくは言う。

「それはですね。ウールが『封印魔法』を掛けてくれたからです」

「・・・そうだったのか、まあ、ウールなら納得だな」

ふう、良かった怪しまれていない・・・

嘘はついてしまったがやむ終えん。

この後にぼくたちは夕食を食べた。

夕食中に村の人達の事が気になったので聞いたところみんな、各自家に帰ったようだ。
良かった良かった。

そして夕食を食べ終わり、ぼくは家族に「おやすみなさい」と言い残し、
自室に上っていく。

こうして今の状態だ。
本当に良かった。何も無くて・・・
本当に・・・

そう思いながらぼくは、窓の外を見上げる。
さっき、ウールにぼくの夢の事を言った。
ウールは若干驚いていたが「ふふ」と笑っていてくれた。

すると、ウールが窓から手を伸ばし指を指しながら言った。

「あれじゃ無いですか？マスター？あの青いの！」

ぼくはウールの指を指した方へ目を向ける。

そこには夢の中で出会ったあの小さな聖獣、青い不死鳥の姿があった。

ぼくは腕と指を伸ばす。

その青い不死鳥はヨロヨロとしながらもぼくの指目掛けて飛んでくる。

そして、青い不死鳥はぼくの指にとまり、「ピヨッ」「っと可愛らしい鳴く。

ぼくは小さな青い不死鳥を胸に抱き、「これからよろしく」と声をかける。

それを受け入れるように小さな美しい翼を広げる。

今日は大変だったけど、楽しい日だった・・・

家族会議（後書き）

皆さんどうでしたか？ いやあ、オルツス受け入れてもらえました。良かった、良かった・・・

感想・一言お待ちしております。次は設定が大分続くと思います。あつ！今回の多分2章は終了です。

最後まで読んで下さってありがとうございます！

設定？（前書き）

皆さんこんにちは！今回は設定です。まあ、しばらくは設定が続きますが……。この設定には2章に登場した人物、魔法、魔物などを書きました。

？になっているのは今の状態ではわからないという意味です。
では、本編ではないですがお楽しみください！

設定？

主要人物、その他の登場人物

名 オルツス・ワーソン（神宮 正和）（男）

種族 人族 歳 5歳（精神年齢19歳）

体重 18kg 身長98cm

誕生 500年12月25日

容姿 上の中

髪は金色で首筋ほど

目の色は左目、金色、右目、赤色

性格 前回と変わっていない。

ステータス

知力B 力D 走力B 体力B 精神D 集中B 回

復D 運D

魔力量A、精製度C、操作力S、戦闘力A

属性

火A、水A、風？、土？、雷？、闇？、光？、無？、氷？、時？、
重力？、空間？

特殊能力

ホワイトウェポン
白い武器、オッドアイ（何かがある）、魔力の壁、魔力の翼、
念話（ウールのみ）

武器

ホワイトウェポン
白い武器

（白刀、浄化銃、浄化散弾銃、など）

キャラ説明

前回とほとんど変わり無し。

髪が金色になり、目が金と赤のオッドアイとなったが、父のアーサーが『変色魔法』を

掛けた事で問題は起こっていない。ステータスは子供のため全てを發揮できないため、

通常ではかなり抑えている。魔力の操作がとてうまく、魔力の壁、魔力の翼などの能力が備わった。

名 ウール・ワースン（女）

種族 獣族（狼族（フェンリル種）） 歳 12歳

体重 ? kg 身長 180 ～ 80 cm

獣化 ? kg 身長 10 ～ ? cm

誕生 493年 ?月?日

容姿 上の上

髪は白銀で腰まである
目の色は金色

獣化 白銀の毛並み

人獣化 犬耳と尻尾が生える。
少し体毛が増える。

性格 マスター（オルツス）のためならなんでもする。
自分の意思で行動する事が多く、大胆。
お調子者、積極的、やさしい

ステータス

知力B 力D 走力D 体力C 精神B 集中C 回

復D 運B

獣化 知力B 力S 走力SS 体力S 精神B 集中B 回

復B 運B

人獣

知力? 力? 走力? 体力? 精神? 集中? 回

復? 運?

魔力量B、精製度B、操作力B、戦闘力A

属性

火?、水?、風?、土?、雷?、闇?、光S、無?、氷A、時?、
重力?、空間?

特殊能力

人化、獣化、人獣化、念話（オルツスのみ）

武器 白いワンピース（人化中のみ）

キャラ説明

オルツスの事が大好きな獣っ子。獣族で狼族フェンリル種でかなり強い。

すでに光属性の最上級、回復魔法を覚えている。
さらにオルツスが唯一自分の全てを話しており信頼をおかれている

名 アーサー・ワートン（男）

種族 人族 歳 26歳

体重 64kg 身長182cm

誕生 479年 6月20日

容姿 上の上

髪は金色で肩口まである

目の色は金色

性格 争う事を嫌い、素直に人の言う事を聞く

だが、自分の信念は曲げない。

一途、温厚、素直、真っ直ぐ、モテモテ

ステータス

知力SS 力S 走力S 体力S 精神SS 集中SS 回復A 運A

魔力量SS、精製度S、操作力S、戦闘力S

属性

火?、水?、風?、土?、雷?、闇?、光?、無SS、氷?、時?、重力?、空間?

特殊能力

?

武器

?

キャラ説明

オルツス達がいるマーズ大陸の南の森にあるイチイ村の領主。

位は中流貴族。魔法学校の時にマリアに一目惚れし、何度もアタックし

学校卒業してから1年後の17歳で結婚した。

学生時代はウールの母が使い魔だった。

得意魔法は結界系で、体術・剣術なども得意としている。
妻のマリアとはラブラブである。

名 マリア・ワートン（女）

種族 人族 歳 26歳

体重 ? kg 身長 166 cm

誕生 474年 6月20日

容姿 上の上

髪は金色で長さは腰まどまで

目の色は赤色

性格 戦うことはあまり好きではないが戦闘で解決する事がよくある。

周りの事を見て判断するリーダー性もある。

一途、おてんば、リーダー

ステータス

知力 S 力 A 走力 A 体力 A 精神 S S 集中 S S S

回復 S S 運 S

魔力量 S S S、精製度 S S S、操作力 S S、戦闘力 S S

属性

火 S S S、水 S S、風?、土?、雷?、闇?、光?、無?、氷?、
時?、重力?、空間?

特殊能力

?

武器

?

キャラ説明

アーサーの妻。

元は平民だが魔力学校でアーサーに一目惚れされ、何度もアツクされた後アーサーに惚れ、

学校卒業1年後の17歳の時に結婚し中流貴族の位を授かった。

得意魔法は攻撃系でさまざまな属性で攻撃する。

最も優れている属性は火で他には回復魔法・補助魔法・剣術も得意としている。

夫のアーサーとはラブラブである。

名 ジル・ワートン（男）

種族 人族 歳 9歳

体重 31kg 身長 138cm

誕生 496年 4月18日

容姿 上の中

金色の髪で長さは首の中間ほどまで
目は金色

性格 弟のオルツスの面倒を良くみるしっかり者。

最近アーサーと戦闘訓練受けるようになってから戦いに興味を持ち出した。

面倒見がいい、しっかり者、モテモテ

ステータス

知力B 力C 走力B 体力C 精神D 集中C 回

復C 運B

魔力量C、精製度C、操作力D、戦闘力C

属性

火?、水?、風?、土?、雷?、闇?、光?、無?、氷?、時?、
重力?、空間?

特殊能力

?

武器

?

キャラ説明

ワートン家の長男。

しっかり者でオルツスの面倒を良くみるいい兄であるが、

すでに20回以上も村の子達から告白されていてモテモテである。

今現在アーサーと訓練中で、得意としているものは体術・剣術・補助魔法。

後、3年するとアーサーやマリアが通っていた魔法学校に入学する。

名 ヘルシス (女)

前回と変わっていないため無し

名 エリー (女)

種族 人族 歳 4歳

体重 ? kg 身長 87 cm

誕生 501年 3月3日

容姿 中の中
赤色の髪で長さは肩まである。
目の色は青色

性格 ?

ステータス ?

特殊能力 ?

武器

？

キャラ説明

魔物に襲われているところをオルツスに助けられた。
綺麗な赤髪の女の子。

名 青い不死鳥（？）（名前不明のため種族で表す）

種族 聖獣族 歳 ？歳

体重 ？kg 身長 12cm

誕生 ？

容姿 ？

性格 ？

ステータス

？

特殊能力

？

武器

？

キャラ説明

ヘルシスが異世界から連れてきた聖獣。

モブキャラ

名 村人（男女）

特に無いためなし

登場魔法

・ 一時封印魔術

・ 通訳魔法

・ 空間移動魔術

・ 火の玉

・ 封印魔法

・火の壁

・結界魔法

・原初の火

・水弾

・氷のドリル

・水の半球

登場魔物

・ブラウンベアー

・鉄熊

・デビルドラゴン

・デーモンドドラゴン

通貨				
1 G	1 S ゴールド	1 C シルバー	1 B カーボ ブロンズ	イニ ュ ー ト
1 0 0 0 0 0 円	1 0 0 0 0 円	1 0 0 0 円	1 0 0 円	地球 — (日本)

設定？（後書き）

最後まで読んでくださった皆様ありがとうございます。

どうでしたか？結構？のところが多くてすいません。魔法、魔物の説明は別のに書くのでご了承ください。最後にはイニユートに通貨を載せてみました。この通貨設定は次の3章から使用します。

次は武器設定を載せたいと思っています。設定？でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499y/>

世界の調和者

2012年1月8日02時00分発行